



Title	小さな信用と貧困問題の解決：グラミン銀行のマイクロ・クレジットと女性たち
Author(s)	水口, 美佳子
Citation	北大法学研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル, 9, 71-99
Issue Date	2003-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22338
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P71-99.pdf



小さな信用と貧困問題の解決

— グラミン銀行のマイクロ・クレジットと女性たち —

みず ぐち みかこ
水 口 美佳子

目次

はじめに	72
第1章 グラミン銀行の設立	72
第1節 貧困層へ到達しない海外援助	73
第2節 金貸しという貧困の歯車	74
第3節 貧しい人々を排除する一般銀行	75
第4節 グラミン・バンク・プロジェクトからグラミン銀行へ	75
第2章 グラミン銀行の組織と戦略	77
第1節 グラミン銀行の組織構造	78
第2節 職員の使命感とトレーニング	81
第3節 運動体として発展する組織と問題解決	83
第3章 貧困克服の出発点	85
第1節 貧困の文化と土地なしの人々の価値	85
第2節 小さな信用と大きな自信	86
第3節 貯蓄による基盤強化	87
第4章 女性の借り手と社会開発	87
第1節 二つの事例から	88
第2節 グラミン銀行による人生と社会の変化	91
おわりに	93

はじめに

「1日1食しかありつけなかった人が2回食事をするができるようになり、着たきり雀の女性が2枚目の服を買えるようになること」⁽¹⁾

ムハマド・ユヌス (Muhammad Yunus) 教授⁽²⁾はこの変化を「開発の奇跡」⁽³⁾と呼ぶ。日本人の日常生活と比較すると当たり前の水準にも及ばない、実に小さな変化である。しかし、貧困の悪循環から脱出できずにいた人々にとっては、「奇跡」と表現される大きな変化である。これまで起き上がれずに寝ていた人々が次々と立ち上がるような、逆ドミノとも言うべき小さな輝きのある波は、今、バングラデシュから世界へと広がっている。

貧しい人々の中でも特に貧しい最底辺にいる女性を対象に、銀行に類似した制度を確立し、マイクロ・クレジット (micro-credit: 少額の信用貸付)⁽⁴⁾を提供し、彼女らの多様性に満ちた潜在能力に光をあて、貧困緩和に立ち向かったプロジェクトがある。

ベンガル語で「村」を意味する *grameen* を冠したグラミン銀行の活動である。現在、貧困層と呼ばれる社会の底辺にいる 240 万人近くの人々が、物的担保なしに、このグラミン銀行から融資を受けている。貧しいがゆえに誰からも信用されず、人間的価値さえも認められていなかった人々が、少額の資金を手にするチャンスを得たことにより、自らの生活を改善し向上させている。

1971年の独立以来、バングラデシュには、国際機関・先進各国から多額の援助資金が流入した。しかし、長期間にわたる膨大な援助にもかかわらず、その効果がほとんど現われず、それゆえ無能者のレッテルを貼られていた。北海道の2倍ほどの面積に1億2,000万余りの人が住み、1999年の国民一人当たりの国民総生産は370ドル⁽⁵⁾。いまだ国民の3分の1は貧困線以下の生活を強いられている⁽⁶⁾。

しかし、グラミン銀行によって信用され融資を受けた人々の小さな変化は、貧しい人にとっては大きな自信へとつながり、社会を変える希望に満

ちた力となっている。グラミン銀行の成功は、バングラデシュを越えて近隣のアジア諸国だけにとどまらず、アフリカなどの途上国にも大きな影響を及ぼし、さらに国内での経済格差が拡大している先進国においても、この活動の意味が認識されつつある。

本稿では、バングラデシュにおいて貧困緩和を目的に設立され、多大な成果をあげている、このグラミン銀行の活動について考察し、「小さな信用」から得た輝きが未来を築く力となっていることを確認したい。

第1章 グラミン銀行の設立

1971年12月、パキスタンからの独立で新しい時代が到来し、バングラデシュの人々はこれで困窮した生活は終りを告げるだろうと期待した。しかし、1974年の大飢饉⁽⁷⁾もあって、人々はその後も引き続き過酷な現実に直面することとなった。その頃、チッタゴン (Chitagon) 大学で経済学を教えていたユヌス教授は、大学の中で自分が教えている経済理論と、現実の世界とのギャップを強く感じ、教科書からではなく実際の社会から経済学を学ぼうと、学生たちとジョブラ (Jobra) 村の貧しい人々を訪ねて話をしてみた結果、そこには学問の理論とは全く異なる生活があることを知ったのである⁽⁸⁾。

このとき、ソフィアという名の、勤勉で技術があるにもかかわらず不幸な状況にある女性に出会ったことは、後にグラミン銀行が誕生するきっかけとなる幸運な出会いでもあった。

「その時、21歳で3人の子どもの母であるソフィアは極貧状態にあり、生計をたてるため竹を編み、椅子を作っていた。彼女が一生懸命働いても、貧しい生活から脱することはほとんど不可能であった。なぜなら、原料の竹を購入するのに5タカ必要であったが、そのわずかな元手がないうえに借金をし、出来上がった製品を元手を貸してくれた相手の言い値の5.5タカで売らなければならないという仕組みがあったからである」⁽⁹⁾。

貧しければ貧しいほど過酷に働くけれども稼ぎはほとんどなく⁽¹⁰⁾、貧しい人の労働はほとんどただ働きに近く、奴隷のように働いている⁽¹¹⁾という現実を、ユヌス教授らは発見した。貧しい人も自分の持つ技術を活かして立派に生計を立てることができるはずであるが、わずかな元手がないことが原因で、貧困の悪循環から抜け出すことができない生活だった。

同じような状況に陥っていた村人は42人、必要な元手は全部でわずか856タカ(当時、約27米ドル)であった⁽¹²⁾。ユヌス教授がこれらの人々にお金を貸したところ、全員が収入を増やすとともに、借金を確実に返済したことから、少額の元手を融資することにより、貧困の悪循環を絶つことができると確信したのである。

この実験的調査が、貧しい人の中でも特に貧しい土地なし貧困層を対象に、物的担保なしに事業を営むための少額融資を始めることになったきっかけである。

しかし、なぜ既存のシステムでは対応できず、新たにグラミン銀行が必要であったのか。

第1節 貧困層へ到達しない海外援助

独立以来バングラデシュには、国際機関、各国政府からの公的援助やNGOによる援助が毎年大規模に流入し、「援助の実験場」と呼ばれてきた⁽¹³⁾。

バングラデシュは1970年代後半からは毎年10億ドルを超える有償・無償のODA資金を供与されてきた。これらODA資金は政府開発資金の70%以上を占め、1980年代には100%に達した年もみられるなど、バングラデシュの経済開発にとって決定的な役割を果たしている⁽¹⁴⁾。そして、独立から1996年6月までの25年間に受け取った開発援助資金は306億3,100万ドルに達している⁽¹⁵⁾。

しかし、いかに海外援助がなされようと、最下層の貧困の緩和には貢献しておらず⁽¹⁶⁾、バングラデシュの国民としてユヌス教授は疑問を抱いていた。

これは、バングラデシュに流れ込んできた巨額の援助資金がどこに消えたか、という問題につながる。つまり、海外援助の受益者は実際には誰であるのかということである。

ユヌス教授はこう述べる。「(国際援助の)75%は、ドナー国へ還流していった。援助の残り25%は、そのほとんどがローカルのコンサルタント、アドバイザー、建設施工業者、官僚、技師へと流れていった。彼らも受益者である」⁽¹⁷⁾。そして、「貧しい人々へはほとんどトリックル・ダウンされていない。貧しい人々の名目でなされるけれども、こうした援助から利益を得る人々はすでに富んでいる人々である。海外援助は、貧しい人々の名目で権力者に利益を与える慈善事業となる」⁽¹⁸⁾と断言する⁽¹⁹⁾。毒は栄養より早く効くというが、バングラデシュに対する海外からの援助は、栄養より毒としての作用の方が早く回り、ますます援助依存が深まるばかりで、バングラデシュ政府は腐敗し、貧困という問題を解決する能力を有してはいなかったのである。

では、なぜ貧困層が援助の受益者になることができなかったのであろうか。

「貧しい人とは誰であるかを明確に理解していないプログラムは、よくある。プログラムの立案者は、あるときは小農を貧しい人として語るかもしれない。別な場では、仕事のない人、字が読めない人、栄養不良で苦しんでいる人、25エーカー以下の土地所有者を意味するかもしれない」⁽²⁰⁾と、ユヌス教授は、各種プロジェクトにおいて、貧困層という言葉が明確に定義付けしていないことを指摘する。そして、定義付けの不明確さによってもたらされる影響について、次のように述べている。「曖昧な概念は、貧困に焦点を当てたプログラムの組み立てに大きなダメージを与える。ruralとpoorを取り違えたり、small/marginal farmerは貧しい人の同義語であると信じている人がいる。バングラデシュでは、人口の半分はmarginal farmerより貧しい。彼らは土地なしの人々である。いずれにせよ、貧しい人々全体の代表としてfarmersという特定の職業グループを定義するこ

とは、賢明ではない。バングラデシュにおける農作業は男性の仕事である。人口の残り半分を占める女性の存在について忘れてしまうことは、いかなる開発プロジェクトにとっても、避けることのできない混乱でもあり、ダメージでもある⁽²¹⁾。

そこでユヌス教授は、「開発の定義を再定義する必要がある。開発とは当該社会の人口の底辺50%の経済状況における積極的变化を意味すべきであろう。一人当たりの所得ではなく、その国の底辺の人口50%の一人当たりの所得が求められるべきだろう⁽²²⁾」と、各国の状況により、底辺の人口x%について焦点をあて、開発効果を探るべきであると主張する。

このように、貧困ゆえに海外援助が流入したバングラデシュであったが、貧困層を明確に定義することなく実施した援助プログラムでは、貧困問題の解決には結びついておらず、結果として、利権を得る者はより裕福になり、貧しい人々は貧しいまま、あるいはさらに貧しくなり、貧富の差が拡大するだけであった⁽²³⁾。バングラデシュに住むユヌス教授にとっては、海外援助の負の作用については早くから気付いていたことであり、貧困という問題解決のために、より現地の実情に合ったプログラムが必要であると考えたのは、ごく自然なことであった。

第2節 金貸しという貧困の歯車

村の金貸しは、*mohajan*⁽²⁴⁾と呼ばれ、古くからバングラデシュにある制度である。インフォーマルな金融は、当たり前のもので社会的に受け入れられており、貸し手・借り手双方のほとんどが、かなり不当である契約の性質を気にとめていないようだ⁽²⁵⁾。

金貸しからのローンのために、様々な担保物件が提供され、利息の支払いは年300%、400%にもなる。それにもかかわらず、貧しい人はそのまま条件を受け入れる。この高利とそれを受け入れる状況には論拠があるとはいえ、過酷なものである⁽²⁶⁾。

理不尽な利率により、貧しい人は事実上、期限

内にローンの元本を返済することは難しい。その結果、金貸しは2つの点で優位に立つ力を持つ。一つ目は債務不履行の場合であって、金貸しは品物を手に入れることになるが、それは主たる目的ではない。二つ目は利息の返済という形態で借り手の定収入を継続的に吸い上げる状況であって、金貸しはこの状況の方を好む。なぜなら、借り手は貸し手に対し義務と従属を感じ、貸し手は次回も再び後援者、保護者としての役割を演じることが期待されるからである。ローンの業務は経済的な関係と同様に、社会的関係をも確立する手段となる。両者の間の会話は、厳密にローン提供という経済的評価よりは、むしろ特殊な社会的関係を確立する手段となるのである⁽²⁷⁾。

借り手にとってはローンの重荷から自らを解放することはこの上なく困難なことである。古いローンを返済するためにさらに借金をし、最後には死に至ることが救済手段となることさえもある⁽²⁸⁾。

ロバート・チェンバース (Robert Chambers) が述べるように、貧しい人々が不測の事態に対して脆弱だという状態は、社会慣行 (ダウリ、ブライドプライス、婚礼や葬式) や災害、健康上の問題 (病気、妊娠や出産、事故)、非生産的な支出、そして他者による搾取によって突然の出費が必要になる事態に直面した時、それに対処するための十分な蓄えを持ち合わせていないことなどから来ている。こうした事態により、結局貧しい人々は、手元に残るほんの少しの財産さえ売り払ったり手放したりしなければならず、それらは二度と取り戻せない。こうして、後戻りすることができない「貧困の歯車」(poverty ratchets) がまた一つ回り、貧しい人々はさらに貧しく、脆弱になっていくのである⁽²⁹⁾。

結局、貧しい人々が金貸しに依存することは、自らの自由を手放すことになり、真の問題解決どころか、それは貧困の悪循環の中に深く身を投じていることであり、自殺行為に等しいのである。

第3節 貧しい人々を排除する一般銀行

貧しい人々が元手を必要とする場合、ユヌス教授は当初、既存の一般銀行から貸出しを受けることが望ましいと考えた。そこで、ユヌス教授は、貧困というローカルの問題を解決するために一般銀行に近付いたが、問題はローカルの問題でないことに気が付いたのである⁽³⁰⁾。すなわち、銀行での融資には物的担保が不可欠であり、貧しい人は担保を提供できないので貸すことはできない⁽³¹⁾と、人ではなく物の方を信用するのが既存の一般銀行だった。バングラデシュにおける他の多くの制度と同様に、この国の銀行制度は主に都市部を対象とし、経済的に豊かな層のニーズに適合していた⁽³²⁾。

しかし、それは健全に機能しているわけではなく、佐藤宏は、本来産業資本家を育成するはずの公的信用機関（工業銀行・工業金融基金など）の民間への中・長期貸付は、多額の未返済額を抱えて行き詰まり、バングラデシュの重要産業において大口の滞納が発生している事実を指摘している⁽³³⁾。

バングラデシュでは、ローンを返済するという伝統がない。そして、権力がある人ほどクレジットを悪用し、公的財産の横領がほとんど当たり前になっているほどである。その結果、悪用する人ほど賞賛され、国民的英雄になる⁽³⁴⁾。一方、土地なしや女性のような農村部の不利なグループは、社会の最も大きな層を構成し、単に生存し続けるためにクレジットを必要とする人々であるにもかかわらず、全く銀行業務の対象範囲外に置かれていた⁽³⁵⁾。

結局、既存の銀行は持てる者はより持てるようになる原則に基づいており、もし何も持っていなかったら、何をも得ることはできない仕組みになっていたのである⁽³⁶⁾。ユヌス教授は、バングラデシュでの銀行業務は、裕福な人に対する慈善事業にほかならないと述べている⁽³⁷⁾。

ユヌス教授は、既存の一般銀行がこのように不公平を前提とし、それを維持あるいは拡大するシステムとして機能していることに疑問を感じた。

貧困は貧しい人々によって作られるのではないし、彼らによって維持されているわけではなく、貧困のルーツは既存の制度・概念・理論的枠組みの中に見出すことができる⁽³⁸⁾。クレジットとは、本来、一部の裕福な人々の独占的な特権である、という神話は打破される必要があり、性質上、必然的に貧しい人々を遠ざける理由は何もないと考えた⁽³⁹⁾。

そして、「担保はお金の返済を保証するものではない。それは、好き勝手に自分だけ得をしようとする特権階級の人々によって作られた神話である⁽⁴⁰⁾」と、銀行業務における物的担保の存在意義に疑問を抱いたのである。

まさしく、食べ物、衣服、住居、教育、健康のようなものと同様に、クレジットは人間の基本的な人権の一つである⁽⁴¹⁾。しかしながら、貧しい人々は物的担保となるような財産を有していないことから、既存の一般銀行にとっては、貧しい人々が顧客になる可能性は無に等しく、無縁の存在だった。

そこで、ユヌス教授は、「すべての貧しい人には、自分の経済的状況を改善するための公正な機会が与えられなくてはいけない。これは、その人のクレジットへの権利を確立することによって容易になされる。既存の金融制度がこの権利を明確にできないのであれば、この基本的人権を保証することになる代替的な金融制度を見出すよう支援することは、国家及び世界共同体の義務である⁽⁴²⁾」と確信した。結局、お金に近づく権利は、貧困を取り除き、その人自身の可能性を広げ、自ら活動的な経済主体となり、個々人の尊厳を確立するために極めて重要であると感じたので、グラミン銀行は貧しい人々を不可賤民とする一般銀行のコースト制度に挑戦することにしたのである⁽⁴³⁾。

第4節 グラミン・バンク・プロジェクトからグラミン銀行へ

1 グラミン・バンク・プロジェクトの開始

ジョブラ村での実験的調査がそのままグラミン銀行の設立となったわけではなく、まずは、グラ

ミン・バンク・プロジェクト（以下 GBP と略する）として開始した。そのスタートポイントは、バングラデシュにおける貧困問題の解決については政府機関は非効率で無能である、ということへの対抗的な解決戦略であった⁽⁴⁴⁾。

GBP は次のような目的で提案された⁽⁴⁵⁾。

- ① 貧しい人々に銀行業務の便宜を提供する
- ② 金貸しからの搾取を除去する
- ③ あまり活用がされていない、あるいは現に活用中の人的資源のために、事業を営む機会を創出する
- ④ 不利な立場にいる人々がお互いに助け合い、理解を深め、影響しあい、社会的政治的経済的效果を見出すことができる組織的形態の中へ人々を導く
- ⑤ 「低所得→低貯蓄→低投資→低所得」という従来の悪循環を「低所得→クレジット→投資→所得増→投資増→所得増」と発展するシステムへ方向転換する

1976 年に始まった、貧しい人の中でも特に貧しい土地なし貧困層を対象に、事業を営むための物的担保なしの GBP は、資金面及び人材面でバングラデシュ銀行、国営商業銀行、BKB (Bangladesh Krish Bank : バングラデシュ農業開発銀行) の支援を得て、事業を展開していった。

地域としては、1976 年にはジョブラ村 1 村での実施であったが、1982 年時点では 745 村をカバーするに至った。また、メンバーも、1976 年の 10 人から、年を追うごとに爆発的に増加し、1982 年には 3 万 416 人にも達した。そして、この間の返済率は一貫して 100% を保持した⁽⁴⁶⁾。

2 グラミン銀行の設立

1983 年、グラミン銀行法が制定され、法人格をもつグラミン銀行が正式に誕生した。株式の所有状況は、そのスタート時点において、政府 60%、借り手 40% であったが、1986 年時点で、政府 25%、借り手 75% になり⁽⁴⁷⁾、現在は借り手の株式所有が 93%⁽⁴⁸⁾ にまで達し、名実ともに貧しい人々のための銀行となっている。また、銀行運営に関わる資金として、バングラデシュ銀行のほか、

IFAD (International Fund for Agricultural Development : 国際農業開発基金)、ノルウェーの NORAD (Norwegian Agency for International Development)、スウェーデンの SIDA (Swedish International Development Authority)、フォード財団などの海外からの援助も受けていた⁽⁴⁹⁾ が、現在では自立した経営ができる状態となっている。

ところで、人ではなく物を信用し、貧困層が差別・排除され利用できない既存の銀行システムはファイナンシャル・アパルトヘイトであると理解したユヌス教授は、正反対といえるシステムをグラミン銀行に導入した。すなわち、貧困層の利用を前提としているため、利用、貸付け、返済などが容易にできるように配慮している。

* 取引きの場

- 一般銀行は、主として都市部にあり、利用者が銀行へ行き取引きを行う。
- グラミン銀行は農村を中心に活動を展開しており、行員が借り手のところへ出向き、ウィークリー・ミーティングの場で返済等の業務がなされる。

* 書類の作成

- 一般銀行を利用する人は、預金及び融資を受ける際に書類を作成する必要がある、当然読み書きの能力が要求される。しかし、バングラデシュは識字率が低い⁽⁶⁰⁾ ことから、利用者は一部の裕福層に限られる。
- グラミン銀行では、借り手が書類を作成する必要はない。ただし、メンバーになるにあたってサインが必要なことから、そのための研修がある。

* 担保

- 一般銀行は、融資を受ける際に物的担保を必要としている。したがって、財産を持たない者は、一般銀行においては当然のごとく排除されることになる。ユヌス教授はこれを、不信を前提にしたものであると考えている。
- グラミン銀行は、物的担保を要求せず、5 人でグループを組んで返済を確実にする社会的

担保を要求する。これは、人を信用することから成り立つ関係である。

*** 融資額**

- 一般銀行は、書類を作成する手間とそこから得る利益を考慮し、取り扱うのは大金のみであり、結局、利用できる者は限られる。
- グラミン銀行は、少額からスタートし、1年で返済する。規則に従い確実に返済をなした人には、累進貸付けを受ける権利がある。

*** 利率**

- 一般銀行の利率は、グラミン銀行より低い、複利である。
- グラミン銀行の利率は20%と高いが単利で、借りた翌週から毎週返済し、1年で完済する。

*** 利用者の性別**

- 一般銀行は、バングラデシュの社会的通念として顧客は主に男性であり、女性が利用することは難しい。
- グラミン銀行は、男性も利用できるが、女性の借り手が94%以上と圧倒的に多い。

3 世界へ広がるマイクロ・クレジット

バングラデシュのジョブラ村でユヌス教授が学生たちと一緒に行った実験的調査という卵は、GBPという雛に孵り、やがて、グラミン銀行という鶏に成長した。そして、貧困緩和を目的に貧しい人々に少額の資金を貸し出すグラミン銀行の活動は、バングラデシュ国内のみではなく、次第に海外からも注目されるようになり、さらに鶏が卵を産むように、マイクロ・クレジットは世界に広がりをみせている。

例えば、国家開発計画の一つの柱として貧困緩和政策を掲げていたマレーシアでは、早くも1986年から、国家の政策を補完する形で、Amanah Ikhtiar Malaysiaという組織がグラミン銀行方式のマイクロ・クレジット・プログラムによる融資を行っており、同国における1990年と1995年の貧困率を比較すると、一般貧困層は16.5%から8.9%へ、極貧層は3.9%から2.1%へと減少している⁽⁵¹⁾。

グラミン銀行では、1989年にグラミン・トラス

トを設立し、世界の多くの国にマイクロ・クレジットのノウハウを提供している。アジアやアフリカの途上国だけではなく、国内で貧富の格差が生じている先進国であるアメリカでも、グラミン銀行と交流しながら同様の試みを実施しており、グラミン銀行のマイクロ・クレジットは、「初めての第三世界からの技術移転」⁽⁵²⁾として注目されている。

1997年2月に、アメリカのワシントンで開催されたマイクロ・クレジット・サミットには、日本を含め137カ国から約3,000人が参加し、2005年までに世界の最も貧しい1億世帯に融資を提供することが採択された⁽⁵³⁾。

世界銀行もこの会議に参加し、マイクロ・クレジットの有効性を認識し、小口金融機関を支援しており、マイクロ・クレジットの概念は、急務である貧困との闘いの重要な要素として世界に広がりがつつある⁽⁵⁴⁾。

第2章 グラミン銀行の組織と戦略

第三世界の巨大開発プロジェクトが、第一世界により主導権を握られ演繹的プロセスを通して考え出されたのとは違って、グラミン銀行のアプローチは、変化の行為主体として貧困にある個人に焦点を当て、実践から学び、試行錯誤を重ね、帰納的方法により、生み出されたものである。そして、グラミン銀行と貧しい人々は、共に自立をめざし、長い道程を共に歩み、共に発展してきた。グラミン銀行の借り手たちは、マイナス方向からゼロ地点をめざして歩み、貧困線を越えようと努力してきた人々であり、また、グラミン銀行も、外国政府や国際機関等からの資金援助にいつまでも頼るのではなく、自らも自立をめざして歩んできた組織である。

グラミン銀行は、次のような特色を有している。

*** 対象は土地なし貧困層**

貸付けの対象は、「所有する土地が0.5エーカー(0.2ha)未満または所有する資産の合計が土地1エーカー(0.4ha)相当未満」の貧困

層である。なお、借り手の94%以上が女性であり、借り手が貧困層という厳しい生活状況にもかかわらず返済率は90%前後であり、一般銀行より返済率ははるかに高いことは驚くべきことである。

*** 借り手本位の現場主義**

借り手が銀行に出向くのではなく、村の中に支店を置き、行員が借り手の所まで行く。このため、ほとんどの職員が現場で働いている。

*** 事業を行うための少額の融資**

融資額は年1,000タカ(約2,200円)から1万5,000タカ(約3万3,000円)である。融資されたお金は、脱穀、家畜の飼育、手工芸など、事業に投資することが条件である。融資を受けるにあたり、物的担保は要しないが、それに代わるものとして、5人のメンバーでグループを組む必要がある。

このような際立った特色を備えているグラミン銀行は、どのような組織と戦略を有しているのだろうか。

第1節 グラミン銀行の組織構造

グラミン銀行の組織について、パンカジ・S・ジャイン(Pankaj S. Jain)の研究⁽⁵⁵⁾では、基本的にはヒエラルキー型をとり、大きくは次の3つに区分されるとしている。

*** ローカルの人々の組織**

グループ: Group

センター: Center

*** 現地業務を行う組織**

支店: Branch

地域事務所: Area Office

*** サポートをする組織**

区事務所: Zonal Office

本部: Head Office

1 ローカルの人々の組織

(1) グループ

グラミン銀行から融資を受けるには、物的担保は不要であるが、その代わりに自分で同じ村に住

む人を探し、メンバーとして5人で1つのグループを組む必要がある。いわゆる社会的担保の確保である。グループは、血縁関係ではなく、同じような経済的状况にあり、お互いに信頼しあえる、うまの合う人と組むことが条件となっている。

支店の行員(Bank Worker)は、5人すべてのメンバーが入会資格があるかどうか、上記の条件に適するかどうかを確認する。その後、サインの仕方やグラミン銀行の規則や規律などを理解してもらうために、最低7日間のトレーニングがある。

トレーニングではまず、グループは班長(Chairperson)と副班長(Secretary)を選ぶ。班長はグループとセンターに関する義務と責任を理解し、実行することが期待される。また、各メンバーはトレーニングの期間、共通の貯蓄基金に1日1タカを提供しなければならない。基金は班長、副班長、残りのメンバーというように順に保有される。銀行との関係、メンバーの間の関係においては信頼が重要であり、この手順は、共同で保有する財産に対する誠実さと信頼性についての個人の能力を磨くこととなる。これは、コミュニティにおける社会的経済的責務の基本的関係を築く上での最初のステップとなる⁽⁵⁶⁾。

トレーニングが終了すると、支店長(Bank Manager)によるグループ訪問があり、メンバーの選択は適切か、トレーニングはきちんとなされたか等のチェックがある。これがクリアされると、続いて、地域事務所の所長(Area Manager)による個別訪問があり、クロスチェックがなされる。これらのチェックで満足できないとされる場合は、メンバーを変更したり、再トレーニングがなされる。つまり、入会するには行員、支店長、地域事務所の所長の三者から承認される必要がある。

このように、グラミン銀行はグループへの入会に大変複雑なプロセスを作っている。途中にたくさんチェックポイントを置くことにより、貧しくない人が入会することを困難にしている⁽⁵⁷⁾。

本格的な1年ローンを組む前に、試験的にローンの貸付けと返済の練習がある。グループのうち、

まず2人に貸付け、1カ月ほどで返済がなされる。それがうまくいくと、次は別の2人に、そして最後にグループの代表である班長に貸付けを行い、全員が規則に従い返済できることが確認された後、初めて本格的なローンを組む手続きがなされる。

グラミン銀行にとって、グループの形成とトレーニングのプロセスが、長期安定のための重要なステージであることは経験が示している⁽⁵⁸⁾。

ローンの返済スケジュールは52週で1サイクルとし、50週で元本を返済し、残りの2週で利息分(年利20%)を返済する。ローンは借りた1週間後から返済が始まり、毎週規則的に返済がなされる。グラミン銀行の規則としては、全額返済されるまで新しいローンは組まないこととしており、毎週規則的に返済することが、次の大きなローンを組むための保険のような役割として機能している。

仮にあるメンバーがローン返済で債務不履行になったら、グループ全体としての信頼性や新しいローンという点での将来の利益は危うくなる⁽⁵⁹⁾。グループのメンバーは、もし自分たちが問題を解決しなければ、将来のローンがグループ全体にとって危うくなることを知っているのである⁽⁶⁰⁾。

グラミン銀行を通して広く行き渡っている心構えは、グループが全体として成長しなければならないことである。「あななたは一緒に前進しなければならない。お互いに助け合わなければならない」というメッセージが、機会あるごとに述べられている⁽⁶¹⁾。

(2) センター

前述のグループが6~8まとまって1つのセンターとして機能している。毎週決まった日時に支店の行員とメンバー全員が集合し、ミーティングを行っている。グラミン銀行側は、このウィークリー・ミーティングに出席することの重要性を強調している。

定期的なミーティングは、同時に、毎週の返済がなされる場でもある⁽⁶²⁾。ある区事務所の所長

(Zonal Manager)が、「あなた方自身の心臓の鼓動のように、ローンを返済しなさい」⁽⁶³⁾と、ワークショップで女性たちに述べたというが、まさしくウィークリー・ミーティングはグラミン銀行自身の規則正しい心臓の鼓動であり、順調にローンの返済がなされることは、組織における血液の流れがスムーズであることを物語る。したがって不整脈が生じたときは、健康を取り戻すために迅速に対処する必要がある。そのため、返済及び貯蓄という現金を扱う業務は、メンバー全員の目の前で行われ、遅滞や返済されない個々のケースについては、メンバーにより議論されることになる。つまり、クレジットに関するすべての決定や業務は、メンバー全員の監督の下で行われるのである。

ミーティングでは、より効果的、効率的に業務を行うことができるように、グループ毎に1列になる。班長、副班長、残りのメンバーの順で座り、センター長(Center Chief)のグループが最前列を占める⁽⁶⁴⁾。

班長、センター長は、メンバーがローンを適切に使っているかを監督する重要な役割を担う⁽⁶⁵⁾。また、各班長はセンター・ミーティングでグループの合意を表明するスポークスマンとして期待される⁽⁶⁶⁾。センターに関する決定はグループの合意をベースとしてなされる。グループの構成員がお互いに信頼し納得した上での合意を築くためには、均質性が基本となり、このことはグラミン銀行の運営にとって非常に重要なことである。

このように、グラミン銀行では物的担保を設定しないで、グループによる連帯責任という社会的担保と呼ばれる制度を導入しているが、これは人々のエンパワーメント⁽⁶⁷⁾の手段として機能している。つまり、一人で孤立している場合よりも、5人で討議する場合の方が、グループとして自分たち自身を管理し、自分たちの問題として解決することができる⁽⁶⁸⁾。また、規則を受け入れなかったり、ミーティングに来なかったり、返済や貯蓄をしないことは、本人だけではなく、利益を享受している他のメンバーの道をも閉ざすことになり⁽⁶⁹⁾、グループは疑似的な社会を体験する場であ

り、訓練の場として機能しているのである。そして、センター・ミーティングは、グループにおいて作られる社会的経済的責任関係を強化するものなのである⁽⁷⁰⁾。

グラミン銀行のローンは基本的には借り手である個人に対し提供されるが、同時に借り手はグループの一員であり、センターの一員でもある。ローテーションで班長、センター長などの大役を担うことになるグラミン銀行のシステムにより、それまで社会的役割を持たなかった女性は、社会の一員としての大きな自信を形成していくのである。

ジャインは、グループやセンターでの形式を重んじる活動は、メンバーと行員がグラミン銀行の規則を遵守するという文化を開発するものであり、年に52回、メンバーが毎週同一の行動を繰り返すことは、この文化を押し進めることにつながり、「文化的習慣」というものがグループとセンターの主な目的であり機能であると論じている。

2 現地業務を行う組織

(1) 支店

2001年7月現在、グラミン銀行の支店は全国で1,170支店あり、バングラデシュの68,000余りある村の半数以上の40,346村をカバーしている⁽⁷¹⁾。グラミン銀行の総スタッフの80%は支店で働いている⁽⁷²⁾。

支店はグラミン銀行にとって鍵となる経営単位であり、1支店で約60センター⁽⁷³⁾を受け持つと同時に、その支店を管轄する地域事務所と区事務所、そして本部からの監督と支援を受けている。

1人の行員は10のセンターを受け持ち、毎日午前中に2つのセンターのミーティングに参加して貯蓄と返済金を集金し、午後はローンの利用をチェックし、返済しなかったメンバーを個別訪問するというのが日常業務である。支店長も現場に出向き、不規則な返済ケースのフォローや行員の現場での仕事をチェックし、また、月1回、通帳の記載内容を確認する。

(2) 地域事務所

グラミン銀行には122の地域事務所があり、1

つの地域事務所の傘下には5～15の支店がある⁽⁷⁴⁾。地域事務所の所長と計画官(Program Officer)は毎月各支店を巡回し監督する。そして、支店の行員によってトレーニングを受けた新メンバーの承認のほか、支店の行員の現場における仕事ぶりやメンバーとの関係、フォローアップの問題について把握する。また、所長の重要な役割としては、地方政府機関との適度な関係を保つこと、つまり政府からグラミン銀行の独立性を確保することなどがあげられる。

3 サポートをする組織

(1) 区事務所

グラミン銀行には、15の区事務所がある。

1つの区事務所は、6～11の地域事務所を管轄しており⁽⁷⁵⁾、区事務所の第1の機能は経営責任であり、所長の主な仕事は人事上の情報を得ることである。また、各支店のファンドのフローを監視・把握すること、職員研修を行い、グラミン銀行の哲学を理解させ、現地業務を行う部門と本部を結び付ける役割を担っている。

グラミン銀行では、支店の数が増加するに伴い地域事務所が新設され、地域事務所の増加に伴い新たな区事務所が作られるというように、現地業務を行う組織の拡大に伴い、全体としての組織も拡大してきた。区事務所は、高度に独立性を持ち、自律的なユニットであり⁽⁷⁶⁾、銀行口座管理や基金管理、予算コントロール、プログラム管理、人事などの機能を本部から受け継ぎ⁽⁷⁷⁾、ミニ本部の役割を果たしている。

しかし、現場から全く離れているわけではなく、管内の地域事務所、支店、センターを訪問したり、メンバーのワークショップに出席するなど、月に8日以上現場に出向く所長もいる。区事務所の所長がたびたび現場に姿を現すことは、職員に対する確固たる監督と動機付けの効果を有するが、同時に重要なことは、このことが刺激する情報の流れと情報の交換である。この結果として、区事務所の所長は意思決定のために直接に質の高い情報に触れ⁽⁷⁸⁾、人々と情報を共有することにより、多くの借り手や職員から信頼される関係を築くこと

が可能になるのである。

(2) 本部

本部の機能としては、計画・管理・経営情報システムなどの事業経営、政策形成会議、外部との交渉などが主な仕事である。また、モラルを押し上げることも現場主義を掲げるグラミン銀行では重要な事項であり、現場職員とのコミュニケーションはその核となる活動であり、総裁(Managing Director)であるユヌス教授自身もできる限り現場を訪ね、トップの見方やポリシーを理解してもらおうとともに、現場で働く職員からの直接の情報に耳を傾けるよう心掛けている。

なお、本部で働く職員は、1万人を超える全職員のうちの400人程度である。

4 会計監査

グラミン銀行の内部での会計監査機能は、各区に設置した会計監査事務所に権限が委任されている。スタッフは3～4人と小規模であるが、各支店は1年おきに監査される。監査では、借り手個人の家やセンターでのフィールド調査も含んでいる。その監査の結果は、A—顕著な印象深い進展、B—満足できる進展、C—進展なし、D—状況悪化、E—驚くべき悪化の5段階で評価される⁽⁷⁹⁾。

スタッフは、過ち、盗み、贈収賄、汚職、詐欺、横領については口にしない。これらは全て「不幸な出来事(mishappening)」という言葉を使う。人間的意志薄弱を名付ける思いやりのある仕方であるが、監査の対象から除外されるものではない。監査官は「私たちは探偵ではない。全ての利益のための番犬である」ということを強調する。監査官は、競争相手、スパイや敵対者ではなく、共通の目的に向かってスタッフと協調して働くことを望む仲間なのである。彼らのスタート地点は、非信頼ではなく信頼なのであり、時には現場職員の相談に対し助言を与えたりもする⁽⁸⁰⁾。

グラミン銀行の会計監査官たちは、「肯定否定の会計監査原則(the positive and negative auditing principle)」というアプローチを発展させた。これは、良い手続きと成功は「不幸な出来事」を強調することにより与えられるという基本原理の上に

成り立っている。支店における数日間の監査が終了したら、調べて明らかになったことについて、支店長や職員たちと率直な議論をする。この目的は、何が良く機能し、また何がうまく機能していないかを共に理解するためである。監査の結果、秘密にされるべきことはなく、すべてがオープンにされ、支店の業績を改善するためにどのような方策を講ずるべきかが書類として作成されることになる⁽⁸¹⁾。

監査の報告書は、区事務所の所長に提出されるとともに、総裁もひとつにまとめられた概要を受け取る。そして、顕著な印象深い進展を示した支店には、実績を評価する手紙が送られ、期待に反する業績の支店はその業務状況について注意を喚起することになる。こうした通知は、うまく機能している支店には活気を与え、弱点のある支店には直ちに方向を転換させるものである⁽⁸²⁾。

第2節 職員の使命感とトレーニング

グラミン銀行の組織が拡大成長する中で、必ずしも原則どおりに行われていない事例が見受けられるとの指摘もあるが⁽⁸³⁾、240万人近くのメンバーがこれらの行員とともに貧困からの脱却に努力しており、成果も十分にあげている。

グラミン銀行における職員の使命感とトレーニングは、相互に刺激を与えながら、グラミン銀行が前進する原動力となっている。

ユヌス教授は、「人間社会の主要な責務は、そのすべてのメンバーの人間としての尊厳を確立し保護することである」といつも感じている。貧困とは、人々から人間らしい尊厳を取り去ったものである。貧困とは、すべての基本的人権の否定である。貧困は、貧しい人々が創造したものではない。貧しい人々は、そうではない人々により作り出された環境の犠牲者にすぎない。グラミン銀行での私たちの経験から、貧困はこの世界から完全に除去されることができると確信する。そのためには追加的な資源は必要ない。必要とする全ては、それに到達するための政治的決意である⁽⁸⁴⁾と、世界から貧困を除去することは、方法や手段を見出す

ことより、むしろ意志の問題であることを強調する⁽⁸⁵⁾。

グラミン銀行で中心となる職場は、首都ダッカにある本部の高層ビルではなく、バングラデシュの田舎であり、その仕事は大変地味である。グラミン銀行の職員の使命感は非常に強く、職場では問題解決に向け、職員一人ひとりの力量が問われる。彼らの使命感は、貧しい人々と共に歩むグラミン銀行に就職を希望したという、そもそもの決意に加え、グラミン銀行での厳しいトレーニングで養われ、強化されたものである。

経験というものが最良の教師である⁽⁸⁶⁾という前提のもとに、トレーニング時間の80%は支店が所在する農村地域で費やされ、現場での経験が中心となる。それまで大学で学んでいた若者は、支店での研修で初めてバングラデシュの現実に直面することとなる。

基本的にグラミン銀行は、独立独歩 (self-reliance)、協力 (cooperation)、革新 (innovation)、日頃から貧困を解する心 (empathy into the daily meaning of poverty) の4つの相互作用を通して発展してきた。

したがって、トレーニング・プログラムもここに出発点を置く⁽⁸⁷⁾。訓練生は一般の規則と規律の中で、独立独歩そして柔軟に行動することが期待される。全てのレベルにおけるトレーニング・プロセスはターゲット・グループへの共感と協力を強調する⁽⁸⁸⁾。

訓練生は実生活の場での対処を通して学ばなければいけない。それには仕事そのものだけではなく、バングラデシュの田舎での生活状況に関する問題や難儀も含まれる⁽⁸⁹⁾。学ぶにあたって、読むべき本はない。本のページをめくる以上に、バングラデシュの村々が人生についてより多くのことを若者に教えるのである⁽⁹⁰⁾。

グラミン銀行では、目の前にある貧困という結果だけではなく、借り手の人生も理解し、問題解決に結び付けている。そのため訓練生は、最初の8週間に男女2人の借り手についてのケース・スタディを詳細に書かなければならない。借り手の

両親、子供時代、結婚、生活状況などについて、借り手が語るとおり正確に情報を記録しなければならない⁽⁹¹⁾。貧しい人々から学ぶこの方法は、訓練生が小さな声に耳を傾け、現場からの情報を直接得る実践的な訓練となる。底辺にいる人から学ぶことにより、「認識上の尊厳 (cognitive respect)」⁽⁹²⁾が生まれる。貧しい人々が自分たちの力で運命を変えていくことができるようにするためには、最も貧しい人々から学ぶことが必要不可欠であるが、グラミン銀行のトレーニングでは、まず最初にこの方法を取り入れている。

現在では自転車がよく使われているが、トランスポート (transport) というと、バングラデシュでは今でもたくさん歩くことを意味する⁽⁹³⁾。訓練生は現場でのトレーニングとして、銀行にとって重要なベースラインとなる社会経済データを集め、地域の地図を描くことも要求される⁽⁹⁴⁾。

6カ月の研修中に3回、2カ月を1区分としてそれぞれの終了後に1週間、訓練生たちはダッカのトレーニング機関に集い⁽⁹⁵⁾、経験を分かち合う。自らの洞察と経験を比較対比し、差異を認識し始めることができる⁽⁹⁶⁾。問題が提起され論議されるが、解決される必要はない。彼らは、自分の支店に戻り、疑問に対する答えを自ら見出すように言われている。疑問に対する答えを見出すためには、自らの経験をも考えあわせなければならない。すなわち、全体としてグラミン銀行を理解できればできるほど、正解を見出すことは容易になるのである⁽⁹⁷⁾。

「君が学んだことを機械的に模倣するのではない。君は芸術家であって、機械ではない」と、研修した支店よりもさらに優れた支店を作るようにトレーナーから教えられる⁽⁹⁸⁾。

訓練生の心に好奇心を呼び起こし、学ぶこと自体に対する興味を刺激することが、トレーニングの主要な目的なのである⁽⁹⁹⁾。グラミン銀行のトレーニングは一つひとつ指示されるものではなく、大部分は独習であるため容易である反面、生活条件が厳しい現場でのトレーニングは、教室内の授業とは異なり、困難で厳しいものである。1991

年のトレーニングにおいては、大学で修士号を取得した将来の支店長候補である訓練生では、女性が53.8%、男性が29.6%ドロップ・アウトしている⁽¹⁰⁰⁾。

こうした厳しいトレーニングに耐え、グラミン銀行で働くことになった職員は、強い責任感と使命感を持っている。グラミン銀行が大きく発展してきたのは、トレーニングによって強化された職員の使命感が、銀行にとって基本的な栄養源として作用しているからである。もし個々の職員の使命感が薄れていったら、組織は腐り始め、徐々に全体を蝕むことになるだろう。現場で貧しい人々と向かい合い、ともに貧困という問題を解決していくこうとする職員の使命感は、グラミン銀行の成功要因の1つとして不可欠なものである。

第3節 運動体として発展する組織と問題解決

1 社会的経済的形態としての運動体

グラミン銀行は、「平等」を基調としている組織である。

まず、グループ5人のメンバーはすべて平等であり、センターを構成するグループもすべて平等である。そして、すべての決定はそれらの合意に基づく。センターの代表は、毎年選挙によって選出され、再任することはできない。ローテーションにより、みんなが平等に責任ある役を引き受ける。

また、借り手としてのメンバーは、グラミン銀行の株を1株購入し、株主としてグラミン銀行の経営に関与する立場を有し、組織にとって重要な構成員となる。つまり、グラミン銀行は借り手であるメンバーによって所有されているのである。最高意思決定機関である理事会は13人のメンバーで構成されているが、総裁としてのユヌス教授と政府機関からの3名、そして残る9つのポストにはメンバーである女性の代表者が参加しており、グラミン銀行という組織の中でも、借り手であるメンバーは平等に扱われている。このように、グラミン銀行は、「土地なし貧困層の、土地なし貧困層による、土地なし貧困層のための銀行」⁽¹⁰¹⁾な

のである。

さらに、グラミン銀行という組織の中では、これらの「平等」をふまえ、権利義務の具体的内容が制度として示されており、これが貧困からの脱却という「自由」へつながっているといえる。貸付けと返済という権利義務関係が制度として正しく機能しないと、マイクロ・クレジットは成立しなくなる。すなわち、グラミン銀行を保持するのは規律であり、これは厳格に保っていかないと、組織そのものが崩壊するおそれがある。

メンバーがグラミン銀行から貸付けを受けるといことは、貧困からの不自由を取り除く。この点では、アイザiah・バーリン (Isaiah Barlin) の2つの自由の概念⁽¹⁰²⁾のうち、「消極的自由」の確保を意味する。また、メンバーは借りたお金を元手にし、それぞれ自分の能力に見合った事業に投資し、自営業を営み、自分の潜在能力を発揮することが可能になる。つまり「積極的自由」の達成、実現である。

このように、「平等」と「自由」を個人として自覚するようになった借り手たちは、次の段階として、社会的自立と経済的自立への意識が芽生えて、組織全体として一つのうねりを生じることになる。

グラミン銀行は社会的機能と経済的機能が相互に作用する1つの集合体あるいは1つの形態である。お互いに社会的経済的な責務を有することによって、人々が参加する社会の設計図であり、まさに人々の運動なのである⁽¹⁰³⁾。

アンドレアス・フューグルサング (Andreas Fuglesang) らが述べるように、グラミン銀行の哲学というのは、とりわけ社会的な環境を重視している⁽¹⁰⁴⁾。つまり、グラミン銀行の活動は、平等から自由を経由して、まさに強固な社会的経済的責務の監督と規律を本質とする、貧困を克服するためにある、人々の社会的経済的運動なのである。そして、人々は顧客としてではなく、グラミン銀行のメンバーとしてこの運動に参加しているのである。

2 問題解決型アプローチ

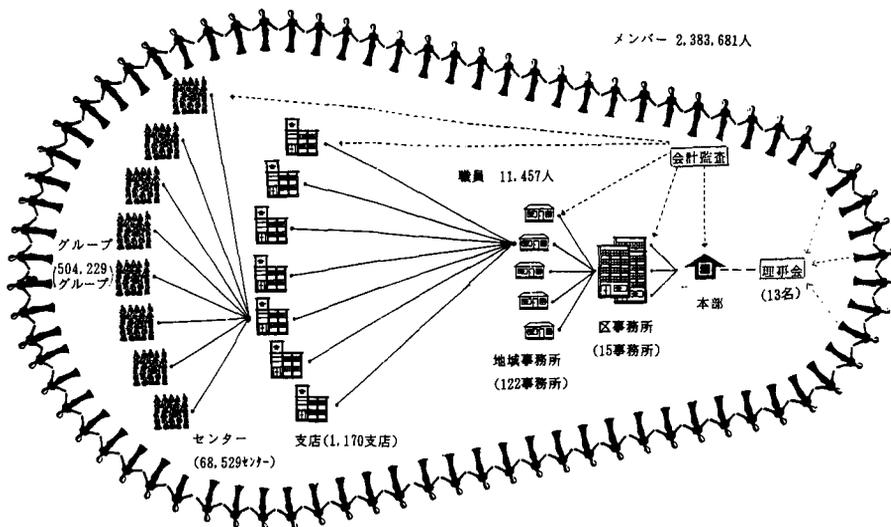
グラミン銀行は、貧困という問題を解決するために活動している運動体である。したがって、この活動に関わる人すべてが、各種の情報を共有しながら、貧困を解決するための最良の方法を常に求めている。すなわち、グラミン銀行では、すべての人々の間で、問題を解決する姿勢を築こうとしている⁽¹⁰⁵⁾。

- * すべての問題には一つの簡単な解決法がある。問題とその解決法は同一のコインの両面であり、それらはいつも一緒に存在する。
- * 問題というのは事実の半分にしかすぎない。問題と解決法が事実全体を構成する。事実全体を知りなさい。
- * 問題に対する解決法を見出せないのは、その問題を理解していないからである。
- * 正しく問題を把握することができたら、解決法への道程の半分まで来たことになる。
- * それぞれの問題にはたくさんの解決法があるかもしれないが、最も優れた解決法は一つである。最も優れた解決法を得るように試みなさい。

グラミン銀行は直面するすべての問題について解決法を見出すことができるということを訓練生に信じ込ませようとする。問題に直面することは面白いこと、すなわち、自分の機知を試すチャンスであると感じさせようとしている⁽¹⁰⁶⁾。

借り手の間でも、問題の解決は重要である。グループやセンターは、みんなで問題解決への合意を見出そうとする。また、ワークショップや会議では、参加者が問題を提起し、みんなで話し合い、その中から各自が答えを見出すような方式で展開している。

グラミン銀行は、常にクロス・チェックを繰り返しながら仕事を進めるとともに、借り手と現場で働く職員の声をできるだけトップへ、同時にトップの考えを現場へと伝えることを重視している。したがって、トップ・ダウン方式の一方通行ではなく、ボトム・アップの方向からも、より多くの情報が流れていることが予想できる。すなわちグラミン銀行では、理念、考え、決定事項などの情報が組織の中を循環し、そのことが常に組織を活性化させている。いわば情報の流れが血液のごとく組織の中を循環しているのは特筆すべきこ



グラミン銀行の組織図

Andreas Fuglesang & Dale Chandler 「Participation As Process-Process As Growth: What We Can Learn from Grameen Bank Bangladesh」の40ページ及び54～55ページの図を参考に筆者作成。数値は2001年7月現在のもの (<http://www.grameen-info.org/bank/hist2001.html>)。

とであり、これが組織として特色あるものになっている。

グラミン銀行では、すべての人に意思決定プロセスへの参加を開放することにより、組織における大きな誤解や緊張は回避されてきた⁽¹⁰⁷⁾。この多様性は強さをもたらすものである。危機のとき、みんなの思考や行動が標準的な方法でパターン化されている組織は、多くの意見や考えがお互いに影響しあえる組織よりも、崩壊する可能性が高い⁽¹⁰⁸⁾。また、問題を解決するためには、創造的であり、革新的であることが求められる。革新は自由、寛容、多様性、好奇心という雰囲気の中においてのみ芽を出すことができる⁽¹⁰⁹⁾。ことから、グラミン銀行は個々人の考え方や意見を尊重し、時には問題解決するために十分時間をかけ、プロセスを重視する方法をとっている。

第3章 貧困克服の出発点

UNDP (国連開発計画) では、貧困について、次のとおり述べている。

「人間開発の視点から見ると、貧困とは我慢し得るまじまじの生活を営むために必要な、選択の幅と機会がまったく与えられないということの意味する。

貧困は、人間が当たり前を送る生活を送ることができないという形で表れる。貧困は、物質的な豊かさに必要なものがないということの意味するだけではない。人間開発にとって最も基本的なもの、つまり健康で創造的な生活を長く送り、つつましい生活水準を維持し、自由・尊厳・自尊心・他者からの尊敬を享受するために必要な選択肢が与えられないことも意味する⁽¹¹⁰⁾。

つまり貧困とは、その結果として、自分の小さな声さえ発することができず、不平等な社会構造の下部に追いやられ、自分の能力を活かす自由さえも奪われ、尊厳もなく、ささやかな希望さえ見出すことができないことである。

ロバート・チェンバースによると、貧窮化は物質的貧困 (poverty)、身体的弱さ (physical weak-

ness)、孤立化 (isolation)、不測の事態に対して脆弱なこと (vulnerability)、政治力や交渉力がないこと (powerlessness) の5つの状態が互いに絡み合うことによって生み出されており、一度その罠にかかった人々はそこからなかなか脱け出ることができないという⁽¹¹¹⁾。

このように、貧困は様々な要因が絡んでいることから、克服することが極めて困難である。しかし、世界銀行が関与した調査によると、グラミン銀行の融資を受ける前、借り手の82.9%は貧困者で、32.9%は極貧であった⁽¹¹²⁾。ところが、借り手になって4.2年以内に、貧困者は82.9%から61.6%へと減少しており、これは1年間に借り手の5%が貧困を克服していることを意味する⁽¹¹³⁾。

バングラデシュにおける貧困という慢性病の蔓延は、統計上の数値に明確に表れるほど、グラミン銀行によって確実に救われ、見事に回復してきている。グラミン銀行ではどのような視点を重視し、問題解決に結びつけていったのであろうか。

第1節 貧困の文化と土地なしの人々の価値

「貧しい人はすべてにおいて貧しい。貧困とは無に等しい⁽¹¹⁴⁾」と考える人が多い。しかし、実際に貧困という問題に取り組むには、まず、貧しい人々の状況と彼らの持っている資源や希望、そして、問題から始めることが重要である⁽¹¹⁵⁾。貧困といえども、すべてが欠けているわけではないという観点に立ち、「それは～ではない」という側面よりも、むしろ「それは～である」という部分を見出すべきである⁽¹¹⁶⁾。そして、単に貧困という症状だけではなく、その原因にメスを入れることが不可欠であり、「貧困の内側からの分析 (within-poverty analysis)」⁽¹¹⁷⁾が必要である。

貧困とは1つの文化であると考えることができる。貧困とは独特の生活様式を有していることを認識すべきである。フューグルサンングらは、その著書で「貧困の文化 (culture of poverty)」⁽¹¹⁸⁾について触れている。「貧困の文化」は貧困の経済でもあり、そのままでは生産と消費の間の慢性的な

ギャップを克服できないことから、貧困は貧困のままである。ましてや、進歩の前提である積み上げの過程をスタートさせ、それを維持させることはとても難しい⁽¹¹⁹⁾。しかし、「貧困の文化」はすべて否定的側面ばかりではなく、評価できる点もある⁽¹²⁰⁾。

①聞く技術

書く技術を有する人が少数であるため、貧困の文化は口承文化である。このことは、人々に聞く技術を発達させる。この聞く技術は、社会を理解する技術となり、社会状況を把握する能力となる。

②記憶する技術

口承文化を通して発達するもう1つの能力は、記憶する技術である。人々は情報や知識を蓄積する方法がない時、記憶力を発達させる。

③サバイバル技術

貧しい人々によって取得される特別な技術は、自己のエネルギーを効率よく使用する能力、すなわち労働の節約である。この技術は忍耐や不屈というような質に達する。つまり、「貧困の文化」は、選択によるものではなく、必要性に応じた少しずつの文化である。

④資源の活用

利用できる資源は非常に様々な方法で活用され、その可能性を最大にして結び付けられている。貧しい人々は、適切な方法で、彼らが利用できる資源の適切な使い方ができる。

⑤職業技術

貧困の文化が労働部門で高い地位を有していることは、よくあることである。バングラデッシュでは様々な仕事があるが、利益があると考えるとき、人々は新しい技術を簡単に取得してしまう。人々は自分が習得した技術を使うことによって自信と自尊心を得る。

このような「貧困の文化」の利点を活かすことにより、貧困の経済を改善することは可能であり、グラミン銀行はまず、貧しい人々が有する利点を活かすことに着目したのである。

ユヌス教授は土地なしの人々について、次のように述べる。

「逆説的であるが、多くの雇用されない土地なし人口は資産としてみなすことができる。彼らが有している最も魅力ある特質は、土地に縛られていない点である。土地とは縁のない土地なしの人々は、積極的で可動性があり、新しい考え方を受け入れる傾向にある。彼らの生存しようとする状況は、彼らにやる気を起こさせる。土地に縛られていないとき、人は伝統的なライフスタイルから自由になる」⁽¹²¹⁾。

グラミン銀行は、「貧困層は、けっして教育されたり指導されなくても、適正な資金を得られれば自ら雇用機会を創出できる」という点で、「意識化」や「社会のめざめ」を活動の中心にすえていたNGOと異なる⁽¹²²⁾。

反対の方向や立場から物事を見るという、いわば発想の転換⁽¹²³⁾から、貧困を文化として評価し、土地なしの人々の価値を認め、その特徴を最大限に活用した手法により、グラミン銀行とメンバーの間には信頼関係が築かれ、貧困を克服するための基盤となったのである。

第2節 小さな信用と大きな自信

マイクロ・クレジットとは、「小さな信用」である。グラミン銀行の活動は、お金に換算できる物(担保物件)を対象として、それを絶大に信用するのではなく、貧しい人自身を信用するという、人間そのものに対する「小さな信用」から出発している。

ユヌス教授は、「人生において何度も逆境に遭いながら、彼らの多くが今日もお生きているという事実は、まさに疑いもなく彼らは非常に有益な技術、サバイバル技術を持っていることを物語っている」⁽¹²⁴⁾、「彼らは私たちにどのように生きていくかを教えてもらう必要もないし、すでにそれを知っている。そこで、彼らに新たな技術を教えて我々の時間を浪費するよりも、彼らの今ある技術を最大限に利用することに決めた。貧しい人々にクレジットを利用する権利を付与することは、彼

らがすでに有している技術をそのまま実践に持ち込むことを可能にする」⁽¹²⁵⁾と、たとえ貧しい状況に置かれても、人々は何らかの生き抜く能力があることを評価している。

ロバート・チェンバースも、「多くのケーススタディは、貧しい人々がほとんどの場合、忍耐強く、勤勉で、積極的で、また独創性に富むことを示している。そうでなければ、彼らが直面しているがんじ絡めの窮乏化 (deprivation) の罫に対抗して日々闘うことはできない」⁽¹²⁶⁾と、貧しい人々がすでに有している能力を認めている。

貧しい人々はトレーニングを受けていないから、あるいは文盲であるから貧しいのではなく、自分の労働の対価を保つことができないので貧しい⁽¹²⁷⁾状況にあるものと理解し、グラミン銀行は、貧しい人々を助けるための仕事を創出するのではなく、貧しい人々が自分の潜在能力を認識する機会を提供することからスタートしたのである⁽¹²⁸⁾。

そして、グラミン銀行は、何よりも、人々の達成感に焦点を当てた。貧しいがゆえに、今まで正式に学ぶというチャンスがなく、無能で価値がないと自分でも思い込んでいた人々にとって、「私はできる！」と達成したことによる喜びの経験は、変化するための大きな力となる。自分自身について良く感じることは、感情的・心理的価値のある財産となるのである⁽¹²⁹⁾。とりわけ、全く読み書きができなかった人にとって、自分の名前を書く能力は誇りの源となる。各メンバーはセンター・ミーティングに来たとき、サインする。書くことが日常的に啓蒙され、人々はさらに学ぼうと励まされることになる⁽¹³⁰⁾。

ユヌス教授は女性たちがエンパワーされる姿を見てきた。

「彼女らは尊厳を持って生きること、互いに協力すること、自分の福利のために組織を作ることの利点を学んだ。固い壁に遮られ、失望していた人々が、今、自分の前に開かれた無限の可能性に満ちたドアを見る。彼女らは今、将来に向かい夢を見るゆとりがある」⁽¹³¹⁾。

小さな信用は借り手に大きな自信を与え、それはグラミン銀行という組織の中で信頼関係へと拡大し、これが貧困を克服する力になっていったのである。

第3節 貯蓄による基盤強化

グラミン銀行から融資を受けると、各メンバーはローン総額の5%をグループ基金に積み立てる。また、毎週のウィークリー・ミーティングでは返済とともに一人2タカをグループ基金に積み立てる。このグループ基金は自分たちの「小さな銀行」として説明される。わずかなお金が必要な時に、金貸しの所へ行かなくてもすみ、身を守るものである⁽¹³²⁾。グループの他のメンバーの同意を得て、あらかじめ決定した期間、条件下で投資あるいは消費を問わずいかなる目的であっても、グループ基金から借りることができる⁽¹³³⁾。

1990年時点でのグループ基金による貯蓄累計は6億4,960万タカであったが、1999年時点では96億7,576万タカと10年で約15倍となり、「小さな銀行」は非常に大きな銀行に成長した⁽¹³⁴⁾。

グループ基金での貯蓄が600タカに達すると、グループは合計500タカ、すなわち1株100タカでグラミン銀行の株を5株購入することが義務づけられている。各メンバーは1株だけ購入する権利を与えられている⁽¹³⁵⁾。

また、任意の貯蓄として、センター基金とも呼ばれる特別基金と個人貯蓄がある。これらの預入れの利率は8.5%である⁽¹³⁶⁾。

このように、グラミン銀行では、借り手は融資を受けると同時に貯蓄による財産基盤を確立していった。貯蓄があることから、借り手は災害等でダメージを受けた場合であっても、自ら起き上がる力を有することとなったのである。

第4章 女性の借り手と社会開発

バングラデシュは、男性より女性の方が寿命が短いという世界でも珍しいの国のひとつである⁽¹³⁷⁾。

この自然の摂理に反しているような現象の背景には、一般社会においてだけでなく家庭内においても男女間に大きな不平等があることが、容易に推測できる。

誕生の瞬間から、女兒は男児が受けられる祝福を望むことができず、出発点から忍耐と犠牲という二つの価値観を学び成長することになる。男性は家族の資産であり、女性は負債である⁽¹³⁸⁾。

子供のなかでの優先度がまず男の子にあり、女の子は栄養のあるものを与えられず、医療面での配慮もあまり受けていない。その結果、バングラデシュでは女の子の早死の割合は高い傾向となっている⁽¹³⁹⁾。

仮に、貧しい男性がさらに貧しい状況に陥った場合、その状況でそれ以上に困難な状況に直面するのは、この国では彼の妻であり、彼の娘である。女性は最も過酷な貧困を経験することになり、貧困が辛いことならば、貧困の女性になることは最悪のことである⁽¹⁴⁰⁾。貧しさのどん底に暮らす女性は、何ひとつ失うものがない⁽¹⁴¹⁾ 状況に置かれる。すなわち、土地もない貧しい女性が位置する貧困とは、すべての選択を奪われた状況であり、まさに究極的な不自由以外の何ものでもない。選択する余地がなく、失うものもない人にとって、後は死を待つだけの人生であり、希望もなく、生存し続ける権利すら否定されてしまうのである。

旧西ドイツ政府の経済協力省担当官であったブリギッテ・エルラー (Brigitte Erler) が、1983年10月にバングラデシュを現地視察した経験を踏まえた彼女の著書で、「貧しいものをさらに貧しくするとはバングラデシュでは多くの場合、食えなくなって死んでしまうことを意味する」⁽¹⁴²⁾ と述べた状況にほかならない。

グラミン銀行では、最初から女性が借り手の圧倒的な比率を占めていたわけではなく、事業を開始して2年後の1978年には、その比率はわずか4分の1だった。しかし、1984年に過半数を超えると、その後の女性の比率は爆発的に増加していき⁽¹⁴³⁾、現在では95%近くを占める⁽¹⁴⁴⁾。

それまで社会的に価値がないと見なされていた

貧しい女性に融資したグラミン銀行の活動は、バングラデシュの常識、慣習を根底から覆すものであった。グラミン銀行のメンバーとなった貧しい女性たちはどのような人生をたどり、貸付けを受けた後、どのように生活を変化させているのだろうか。

第1節 二つの事例から

ここでは、貧困を克服した二人の女性の具体的な事例を考察する。

1 事例1：生まれたときから人間扱いされなかったハジーラ⁽¹⁴⁵⁾

1959年生まれのハジーラは、目の見えない男性と結婚させられた。その男が持参金を求めなかったからだ。ハジーラと夫は、彼女が家政婦の仕事で得るごくわずかな金で食いつないでいた。しかし、3人の子どもにちゃんとご飯を食べさせることができなかった。

「あたしは生まれた時からずっと、自分が役立つだと思ってきました。あたしが生まれたことで、うちの親はもっとみじめな暮らしになっただけ。うちの家族はあたしの持参金なんか払えやしなかった。母さんが、おまえなんか生れた時に殺してしまえばよかったと言うのを、何度も聞きました。あたしは自分がお金なんか借りられる人間だと思えなかったし、借金を返せるとも思えませんでした」。

グループの仲間の助けがなければ、彼女はお金を借りるのをあきらめていたかもしれない。彼女の最初のローンは2,000タカ(60米ドル強)だった。それを受け取ったとき、彼女は涙を流した。グループの仲間たちは彼女に肉牛になる子牛と、脱穀する粉を購入させた。ハジーラは期日どおりに最初のローンの返済を終え、次のローンで土地を買い、70本のバナナの苗木を植えて人に貸し、さらに2頭目の子牛も買った。今では彼女は、水田を人に貸しているほか、ヤギとアヒルと鶏を所有している。ハジーラは言う。「あたしたちは今じゃ1日に3度の食事をとれるようになったんです。子どもたちがお腹を空かせるようなこともな

くなりました。週に1度は肉を食べる余裕まであるんですよ。子どもたちは全員、高校がカレッジくらいには行かせるつもりです。グラミン銀行は母さんみたいなもの、いや、母さんそのものです。あたしに新しい人生をくれたんですからね」

2 事例2：勤勉であるにもかかわらず、人生を切り開くことができなかつたマンツィラ⁽¹⁴⁶⁾

マンツィラは17歳のとき、法律関係の仕事をめざし勉強している男性と結婚し、夫の学費を稼ぐかたわら2人の子どもを出産した。数年たち3人目を身ごもったとき、夫は失業し、怒りと屈辱感から彼女を実家へ戻した。子どもが生まれたので家に帰ると、夫はすでに新しい妻と一緒に住んでいた。夫は容赦なくマンツィラを殴るようになったので、彼女は子どもを連れて再び実家に戻った。

しかし、当時の彼女の実家は大変貧しく、彼女たちは厄介者にされ、部外者のように扱われた。彼女の子どもは、他の子どもたちが食事をした後に残ったものを食べた。マンツィラ自身は他の村に働きに行き、自分の食事代を稼いだ。数年たち、ある土曜の朝、彼女の子どもは激しい下痢になり、まもなく死んでしまった。マンツィラは悲しみで仕事もやめ、3カ月間無気力のまま過ごし、兄が「自分を大切にすんだ！」と叫ぶまで、ただ死ぬのを待っているだけの状態であった。

グラミン銀行が村にセンターをオープンし、彼女は最初2,000タカのローンを受け、ミシンを購入した。やがて彼女の仕事ぶりは高く評価され、彼女の稼ぎは週50タカから4年後には250タカ以上へと増えた。また、彼女はローンを使って小さな農地を手に入れてそこに20本のグアバの木を植え、田んぼを借りて高収穫米を植え、さらに壁がレンガでトタン屋根の家も建てた。

やがて彼女はグラミン銀行の理事になり、グラミン銀行がベルギーの国王から賞を贈られることになったとき、代表として授賞式に参加し、見事に務めを果たした。ベルギーの聴衆の前では、夫との問題、子どものこと、1日1食でなんとか生きてきた8年間のことを話した。

「神は私に手と足と目を与えてくれましたが、以

前はほとんど稼ぐこともできなければ、節約もできませんでした。死にかけて子どもはアイスクリームを欲しがりましたが、わずか1タカがなかったために買ってあげることができませんでした。人生の最初の30年は、食べたり食べれなかったりの暮らしでしたが、今では年老いた親の面倒まで見られるようになりました」。

勤勉なマンツィラは貧困を克服し、再婚して幸せに暮らしているという。

3 貧しい女性への到達

事例1からは、バングラデシュにおいて、女の子の誕生は最初から家族にとって災難とみられていたことがうかがえられる。結婚するときに必要な持参金の用意は親にとって重荷であり、金貸しから借金をしなければならぬことも多かった。そのため女の子は役立たずとされ、ひとりの人間として認められることはなかつたのである⁽¹⁴⁷⁾。これは明らかに尊厳の否定であるが、生まれてからずっと幾度となく、おまえは家族にとって重荷だと告げられると、女性自身もそう信じるようになるのである⁽¹⁴⁸⁾。

事例2からは、女性は結婚した時点で実家からはアウトサイダーとしてみられ、結婚後は夫に依存することになり、しかも家庭内にあつては夫の暴力から逃れることは難しく、結婚そのものが女性自身の尊厳を犠牲にする恐れがあり、人生に対して重い対価を払わなければならないことがうかがえられる。そして、棄てられた女性にとって、自分と子どものために別の家を見つけることは、このうえなく困難であることが分かる⁽¹⁴⁹⁾。

女性は慣習的に「家」にとどまらなければならず、事実上やりくりするものがなくなっても、なんとかしなくてはいけない。もし、家族の一人が飢えるようであれば、それは母親のせいであることは不文律である。飢餓や食料難の日々において、子どもたちを食べさせることができないという辛苦な体験を経なければならないのは、母親なのである⁽¹⁵⁰⁾。つまり、女性は男性の場合よりもさらに厳しい状況で飢餓と貧困を経験することになる。

ユヌス教授は、バングラデシュの女性が直面す

る困難な現実を、次のように述べている。

「貧しい女性の大多数は、夫から虐待を受け、棄てられ、離婚された女性である。彼女らのほとんどが、結婚持参金制度の犠牲者である。我々の社会は、これら女性がそれぞれ独立した主体性と可能性を有し、本来の人権による『人間』である、という事実を容認することを、単に拒否している。こうした女性に対する価値観は、男性優位があまりにも深く影響を与えてきているので、知らず知らずのうちに、抑圧され迫害されることは自分たちにとって唯一の権利であるとまで、女性たちが受け入れるようになってしまった」⁽¹⁵¹⁾。

このように、貧しい女性はすべての自由を奪われてしまう。バングラデシュのような因襲に縛られた社会では、女性たちは経済や社会によって生み出されるすべての苦難を受けとめるための最終地点に置かれている⁽¹⁵²⁾。

しかし、飢餓と貧困に対して闘う機会を与えさえすれば、貧しい女性は貧しい男性よりもごく自然に優れた戦士に変わる。貧しい女性たちは生活を向上させようとする強い意欲を持っていて、自分の人間的尊厳に関し、また、子どもの現在及び将来に対し、一生懸命に働き、子どもの福祉のためには個人的犠牲をも厭わないのである⁽¹⁵³⁾。貧しい人々の間において世帯主が女性であることが多い⁽¹⁵⁴⁾が、貧しい家庭の女性は収入の高いレベルにある女性より、経済面でははるかに活動的である⁽¹⁵⁵⁾。

マイクロ・クレジットでは、男性も女性も即座に自営業を開始することができるが、女性は、賃金雇用下で求められるような犠牲を伴うことなく、収入を得ることができる。彼女は家や子どもから離れる必要はない。新しい仕事に自分を適応させるために新たな技術を習得する必要もない。自分が最も得意とすることによってお金を稼ぐことができる。マイクロ・クレジットは、貧しい男性、貧しい女性とともに自由にするが、男性よりも女性に対しての効果の方がダイナミックである⁽¹⁵⁶⁾。

増加した稼ぎは家庭に入っていくものだが、男

性にとっては、外でお茶を飲んだり、個人的に満足する他の消費に消えてしまう傾向がある。一方、女性は稼いだお金を家族のために使う⁽¹⁵⁷⁾。

女性にマイクロ・クレジットを提供した場合、かなり早い時期から、次のような特徴が認められた⁽¹⁵⁸⁾。

①収入の最初の利益は、彼女の子どもたちが恩恵にあずかる。子どもたちは着る物が与えられ、年長であれば彼は学校に行き始める。

②次段階の利益では、住居の修繕や改善となつて、家族全体が受益者になる。

そこで、中心的役割が貧しい家庭の女性に割り当てられることができるのなら、貧困撲滅のプロセスはより良く、より早く機能するだろう⁽¹⁵⁹⁾と考へ、グラミン銀行は女性に大きく焦点を当てるようになったのである。貧困の克服は不平等の是正であると捉えるならば、グラミン銀行が家庭の中でも貧困の最たる状況にある女性を貸付けの対象にすえ、女性とともに歩むことになったのはごく自然なことである。そして、実際に女性の方が投資の仕方が慎重であり、確実にお金を返済することを示してきた。女性は、より大きい社会的信頼と責任感を示し、女性の知識・情報・技術・収入が増加すると、家族の状況が良くなり、村も発展するのである⁽¹⁶⁰⁾。

小さなことが100万回生じると、大きなものになる。それは強い経済の基礎になる。女性がこの経済の基礎に参加することによって、より良い社会経済の将来にとっての基礎を築くことになる⁽¹⁶¹⁾。そして、女性たちは大きな経済面での改善を経験し、未来の変化と発展に興味を抱くようになるのである⁽¹⁶²⁾。

グラミン銀行は、世の人口の半分を占めながら、貧困の最底辺に追いやられていた女性の活力を十分活用することにより、貧困克服への確かな道を歩む展望を見出し、女性たちの輝きを引き出すことにより、未来への力を創造してきたのである。

第2節 グラミン銀行による人生と社会の変化

1 女性の人生の変化

アマルティア・セン (Amartya Sen) は、「女性にはもはや福祉向上の助けの受動的な受け手にとどまらず、男性にとっても女性自身にも、変化のための能動的な力であると見られるようになってきている。さらに女性は、女性と男性いずれもの生活を変えることのできる社会、変革の力強い推進者なのである」⁽¹⁶³⁾と述べているが、グラミン銀行の事例はまさにこのことを物語っている。

シエド・M・ハシェミ (Syed M. Hashemi) らは、「女性は一度クレジット・プログラムに参加すると、収入の規模は比較的小さいが、エンパワーメントが増し、その効果はかなりのものである」⁽¹⁶⁴⁾と高く評価している。つまり、グラミン銀行に加入し、グループの他のメンバーと接するうちに、女性たちは家庭の外で自らのアイデンティティを開発するのである。

また、グラミン銀行の厳格な管理は、女性が疎外されていたバングラデシュの公共的領域における社会生活では特別のことではなく、より力のある人と接することはメンバーにとってステイタスとなり、女性の自信を増加させるものである⁽¹⁶⁵⁾。

家族計画について調査したシドニー・ルース・シュラー (Sidney Ruth Schular) らは、「プログラム・スタッフとの関わりを通して、女性は公的分野で機能する自らの能力についてより多くの知識と自信を持つようになり、自分の家庭においてもはっきり主張できるようになる。このことは、家族計画や保健サービス提供について恐れずに話すことができるようにし、夫や姑との交渉能力を高めている。さらに、グループを形成し、他の女性と関わることによって社会的ネットワークが広がり、新しい情報源や支援の方法を得ることができる」⁽¹⁶⁶⁾と、述べている。

ハシェミらは、「マイクロ・クレジット・プログラムは、重要な経済的資源へ近づく方法を提供し、女性にジェンダーの障害を乗り越えさせ、自分自身の生活をコントロールする機会を増やし、家庭での地位を改善させるものである」⁽¹⁶⁷⁾と述べて

いる。

2 社会開発プログラム

1984年3月、全国ワークショップに集まった100人の女性のセンター長は、グラミン銀行の社会開発憲章ともいえる次の「16カ条の決意」を採択した⁽¹⁶⁸⁾。

これは、貧困を克服するための、日々の改善としての借り手の心構えであり、目標でもあり、実践すべき事柄でもある。

第3条の住宅について見ると、グラミン銀行では、1984年から住宅ローンの提供を導入した。質素なトタン屋根ではあるが、耐久性のある家を所有することは、より良い生活への夢をスタートさせることができる自信と誇りを人々に注ぎ込む。メンバーは、住宅ローンとして2万5,000タカ(約500米ドル)まで借りることができ、利率は8%で、毎週返済し、10年で完済する⁽¹⁶⁹⁾。2001年7月までに、54万3,743軒の家が建てられている⁽¹⁷⁰⁾。この経験は、機会さえ与えられれば、貧しい人々は自分たちのためにそれなりの家を保有できることを証明する⁽¹⁷¹⁾。なお、メンバーが女性である場合、住宅ローンを受けるためには、あらかじめ土地の権利書は夫から妻名義にしなければならない。そして、完全にローンが返済されるまで、所有権は移転できないことが条件となっている⁽¹⁷²⁾。第11条には、子どもの結婚に際し持参金を禁止することが入っているが、これは社会正義の要求として非常に画期的なことである。1980年に持参金禁止法が制定され、持参金を要求することは違法となった⁽¹⁷³⁾が、今なお悪しき社会習慣として根付いているという。しかし、グラミン銀行の借り手の子ども同志が結婚する場合は、持参金なしで済ませるケースが出てきている。

この他、水を確保するために共同で井戸を作ったり、ポンプを設置したり、子どもたちのためにセンター・スクールを開いて教育にも力を入れている。

グラミン銀行も各種のワークショップを開催し、生活改善のために人々を長期の社会的経済的学習プロセスの中に取り込んでいる。

16カ条の決意

- 1 私たちは、人生のすべての面において、グラミン銀行の4つの原則——規律、団結、勇気、勤勉——に従い、これらを推進します。
- 2 私たちは、必ず家族に繁栄をもたらします。
- 3 私たちは、あばら屋には住みません。
私たちは、家を修繕し、できるだけ早く新しい家を建てられるように働きます。
- 4 私たちは、1年を通じて野菜を育てます。
私たちは、野菜をたくさん食べ、余りを売ります。
- 5 私たちは、植林の季節には、できる限り多くの苗木を植えます。
- 6 私たちは、子どもの数を抑えるよう、家族計画を行います。
私たちは、出費を最小限にします。
私たちは、自らの健康に注意します。
- 7 私たちは、子どもたちに教育を受けさせ、その教育費をまかなえるようにします。
- 8 私たちは、子どもたちとその環境を常に清潔にします。
- 9 私たちは、簡易トイレを作り、それを使います。
- 10 私たちは、井戸水を飲みます。
それができなければ、水を沸騰させるか、ミョウバンを使います。
- 11 私たちは、息子の結婚に際し持参金を取らず、娘の結婚に際しても持参金を渡しません。
私たちは、センターを持参金の災いから解放します。
私たちは、児童婚をさせるようなことはしません。
- 12 私たちは、誰にも不正義を押しつけず、誰か他の人がそうすることも許しません。
- 13 私たちは、より高い収入のために、共同で大きな投資を行います。
- 14 私たちは、いつでもお互いに助け合います。
もし誰かが困難に陥ったら、私たちはその人を助けます。
- 15 私たちは、どこかのセンターで規律違反があることを知ったら、そこへ行き、規律が回復するのを手伝います。
- 16 私たちは、すべてのセンターで体操を始めます。
私たちは、すべての社会活動に共同で参加します。

経済面だけではなく、社会面からもエンパワーされ、また孤立した状態ではなく、組織の中で仲間たちと共に歩むことにより、グラミン銀行の借り手の女性たちは、自信とともに新しい知識も身に付け、貧困を克服することが可能になったのである。

3 社会の変化

バングラデシュのような男性優位社会の国では、貧しい状況にある女性の潜在能力の開花は、まず家庭という基盤において自分らしさを発揮できることから始まるのではないだろうか。その点で、ハシェミらが述べるように、グラミン銀行は女性の生活の変革にとってきっかけとして機能している⁽¹⁷⁴⁾と言えるだろう。

グラミン銀行の借り手が直接社会を変えることは難しいかもしれない。しかし、借り手である女

性たち一人ひとりが、自分たちの生活を向上させる力を身に付けてきていることは確かであり、良き社会を求め、静かにではあるが徐々に社会を変えていくであろう。

グラミン銀行から融資を受ける女性たちは、チェンバースが言う、社会で最後におかれている人々である。貧困線を乗り越えようとする彼女たちの変化は、実に小さな変化かもしれない。しかし、前進するための最良の方法は、小さな進歩を一步一步重ねて、少しずつ変えていくことである。そして、最後におかれている人々を最初に持ってくる努力を一回だけで終わらせるのではなく、何度も何度も繰り返し努力することである。こうしてあちらこちらでなされる小さな逆転は、互いに支え合い、積み重なって大きな動きとなっていくはずである⁽¹⁷⁵⁾。

バングラデシュで1996年6月に行われた国政レベルの第7回総選挙では、投票率が74.96%と過去最高に達し⁽¹⁷⁶⁾、女性も積極的に投票したと見られている。この選挙では、西洋を敵対視し、女性たちを家に留めておこうとするイスラム原理主義政党であるIslamic Societyが、国会での議席を大幅に失わない、17議席から3議席となった。投票後、ユヌス教授は、彼を責める人々から怒りの電話を受けたという⁽¹⁷⁷⁾。

また、2001年10月1日に行われた第8回総選挙においても、投票率は前回同様高く、74.8%に達し⁽¹⁷⁸⁾、1996年以来政権を握っていたアワミ連盟(Awami League)が議席数を146から62へと大幅に減らし、与野党勢力が逆転した⁽¹⁷⁹⁾。この選挙結果については、人々が旧政権の汚職等を批判したものである、とする見方もある⁽¹⁸⁰⁾。

UNDPでは、貧困緩和戦略の出発点は男性と女性のエンパワーメントであり、とりわけ、女性のエンパワーメント及びジェンダー平等が不可欠であるとしている。「女性はすでに、家庭および地域での最前線に立ち、貧困から抜け出し、その影響に立ち向かう努力をしている。……ジェンダー平等に向けて建設的に取り組むことは、貧困緩和のあらゆる行動分野の強化につながる。女性は新しいエネルギー、新しい洞察、新しい組織基盤をもたらすことができるからである」⁽¹⁸¹⁾と述べているが、グラミン銀行の歩みは当初からこの視点に立つものであり、借り手の女性たちのエンパワーメントは、今後も確実に社会全体のエンパワーメントにつながっていくだろう。

おわりに

「我々は尊厳なしに生きている人がいることを知ったら、落ち着いてはいられないだろう。我々が他人に対する尊厳を確保できないのであれば、我々自身の尊厳も無意味な偽りのものとなるだろう」⁽¹⁸²⁾。

ユヌス教授が主張するように、社会の各メンバーの人間的尊厳を保証すること、また、各メン

バーが自分の創造性を示す最良の機会を得ることを確保することは、社会の責務である⁽¹⁸³⁾。真の貧困緩和とは、人々が自分の運命をコントロールできるときに始まるのである⁽¹⁸⁴⁾。

融資というと、私たちはお金だけを思い浮かべる。確かにマイクロ・クレジットとはお金であり、グラミン銀行はお金を扱っている。しかし、グラミン銀行は銀行以上のものである⁽¹⁸⁵⁾。グラミン銀行が借り手である女性たちに提供するものは、意義ある気持ちと尊厳の中に彼女らの社会的経済的現実を再創出する機会である⁽¹⁸⁶⁾。したがって、マイクロ・クレジットは、お金であると同時に、尊厳を確保する手段でもある。

グラミン銀行はお金だけではなく、借り手の女性たちに大きな自信を持たせ、「尊厳」という「パワーの素」を与えたのである。女性たちが身に付けたその「尊厳」とは、貧しさをはねのける免疫力にほかならない。だから逆ドミノのように人々は起き上がることが可能になったのである。

このように、マイクロ・クレジットとは、お互いの尊厳を確保するために人々の信頼関係を築く、最初の第一歩としての「小さな信用」なのである。しかし、それは受取る側にとっては大きな自信となり、初めて人間として信用された喜びが、相互信頼という形で拡大し、大きなエネルギーとなって貧困からの脱却への道を開くことになった。

結局、お金そのものよりも自尊心を築く過程が重要⁽¹⁸⁷⁾であり、個人の尊厳、自己実現による幸福、意味のある人生、そういったものは貧しい人々が自分の力で、自分の夢や願望として、一生懸命努力して作り上げるものなのである⁽¹⁸⁸⁾。貧困を取り除くということは、人々を確立するプロセスなのである⁽¹⁸⁹⁾。

先進国に住む私たちから見ると、彼女らの生活の変化は非常にささやかで小さいものに見えるかもしれない。しかし、数値で示される所得増加が小さくても、単に外から与えられたものではなく、自らの力で手に入れたものは自信につながり、本当の喜びとなるだろう。こうした小さな変化が確

固とした力となり、数多くの輝きを持った花が咲くことにより、やがては社会を変化させていく未来への大きな力となるに違いない。

ひとつひとつの細胞の活性化が身体全体に活気をもたらすのと同様に、貧困を克服していくプロセスを経て、一人ひとりが能力を十分に発揮できることにより、その家族、その地域社会、その国、そして世界は、もっと平和に満ちたものになるのではないだろうか。

ユヌス教授は、「平和とは、国家間、国家内での社会的正義を意味すべきである。それは、すべての人にとっての人権の確立を意味すべきである」⁽¹⁹⁰⁾、「今日、平和は、他のもの以上に、貧困、不公正な社会的経済秩序、民主主義の不在、環境悪化により、脅かされている」⁽¹⁹¹⁾、「戦争に勝利して得られる『平和』は、人々を殺し、その犠牲のうえに成り立つ。真の平和は、人々を確立させること、人々を向上させること、秘めた能力を発揮できるように人々を手助けすることにより、実現することができる」⁽¹⁹²⁾と言う。

そして、「我々は『平和』を再定義しなければならない。平和とは、老若男女すべてを含むあらゆる人間が、尊厳を有し、自由を確保し、自分自身の運命へのコントロールを持って生きることである。平和とは、貧困からの自由である。平和とは、世界のあらゆる市民に対し、すべての人権を確立することである。平和とは、あらゆる人にとって可能となる環境を創出することである。平和とは、安心して暮らせることである」⁽¹⁹³⁾と述べている。

貧困克服を目的に始まったグラミン銀行の「小さな信用」と、そこから生まれた「信頼関係」が、真の平和を求め、今後どのように歩んでいくのか。貧しい人々に学んだ一人として、これからもその行方を見守っていきたいと思う。

注

- (1) Yunus, Muhammad, *Grameen Bank: Experience and Reflection* (Dhaka; Grameen Bank 1997), p.21.
- (2) Muhammad Yunus は 1940 年生れ。グラミン

銀行の創設者で現総裁。チッタゴン大学卒業後、母校で 4 年間経済学を教える。65 年、フルブライト留学生として渡米し、経済学の博士号取得。米国においてバングラデシュ独立を支援し、72 年帰国後、チッタゴン大学経済学部長として就任し、76 年よりグラミン・バンク・プロジェクトを開始し、貧困緩和に対し全力を注ぐ。

- (3) UNDP『人間開発報告書 1999 — グローバリゼーションと人間開発』（東京；国際協力出版会，1999 年），p.21.
- (4) いわゆる小規模金融については、近年、貧困層だけではなく低所得者等を対象とする小口金融等も含め、「マイクロファイナンス」という言葉も使っているが、グラミン銀行が行っている融資については、「信用」という点に着目し、本論では「マイクロ・クレジット」と呼ぶことにする。ユヌス教授もそう呼んでいる。
- (5) The World Bank, *World Development Report 2000/2001* (New York; Oxford University Press, 2000), p.274. Table 1.
- (6) Ibid., p.280. Table 4.
- (7) 1974 年バングラデシュを襲った洪水は 50 年ぶりともいわれ、政治、経済にも複雑な影響を与えた。救援物資が末端まで届くには時間がかかりすぎ、働く場を失った多くの人が都会に流れ込み、飢えと疲労で死亡した。政府発表によると餓死者は 2 万人となっているが、10 万人と伝える新聞もある。食糧不足、物価の異常高騰等、洪水が残した後遺症は深刻であった（アジア経済研究所『アジア動向年報 1975 年版』，東京，1975 年，p.554.）。
- (8) Yunus, op. cit., (not.1), pp.5-6.
- (9) Yunus, Muhammad, with Alan Jolis, *Banker to the Poor: Micro-Lending and the Battle Against World Poverty* (New York; PublicAffairs, 1999), pp.46-47.
- (10) Yunus, op. cit., (not.1), p.12.
- (11) Ibid., p.6.
- (12) Yunus, op. cit., (not.9), p.49.
- (13) 財団法人国際協力推進協会『バングラデシュ』

- 開発途上国国別経済協力シリーズ, アジア編 No. 14 第6版 (東京; 財団法人国際協力推進協会, 1996年度), p.1.
- (14) 長田満江「バングラデシュ経済と開発援助」佐藤寛(編)『開発とバングラデシュ』経済協力シリーズ 183 (東京; アジア経済研究所, 1998年), pp.29-30.
- (15) 同上, p.30.
- (16) Yunus, Muhammad, *We Can Create a Poverty-Free Environmentally Balanced World If We Only Want It* (Dhaka; Grameen Bank, 1994, Re-Print 1996) p.2.
- (17) Yunus, Muhammad, *An Agenda to Build Solidarity Between the North and the Bottom Fifty Per Cent of the South* (Dhaka; Grameen Bank, 1994), p.2.
- (18) Yunus, op. cit., (not.16), p.7.
- (19) このようなユヌス教授の援助に対する認識は、佐藤寛(編)『開発とバングラデシュ』経済協力シリーズ 183 (東京; アジア経済研究所, 1998年)の以下の日本人研究者とほぼ同様の結論になっている。
- 「援助を含めた国家資源を私物化することによってニューリッチと呼ばれる富裕階層が、独立後、特に1980代に急成長した」(村山真弓「バングラデシュにおける援助の社会・政治的意味」, pp.23-24.)
- 「援助があっても貧困問題は依然解決されないままであり、バングラデシュは官民あがて『援助を引き出すための総エージェント化』に陥っており、それが新たな社会構造として加わっている」(谷本寿男「バングラデシュに対する円借款の役割——社会構造に視点をおいた円借款の供与について」, p.77.)
- 「『貧困のバングラデシュ』というイメージそれ自身も、ここでは立派な資源である。ところで問題は、バングラデシュにあっては『援助』は獲得されることそれ自身に目的があり、それがどう活用されるかはあまり考慮されないという点にある」(佐藤寛「援助の実験場としてのバングラデシュ」, p.321.)。
- (20) Yunus, Muhammad, *Credit for Self-Employment: A Fundamental Human Right* (Dhaka; Grameen Bank, 1987, Reprint 1996), p.2.
- (21) Ibid., p.3.
- (22) Ibid., p.2.
- (23) 藤田幸一は、農村の地主・富農層が公的機関や政治家と結びつくことを通じて灌漑施設を「無償」で導入し、中小農に売水することによって、政府、ひいては外国援助から多大な利益を得ていることを指摘している(藤田幸一「灌漑開発と制度的諸問題」佐藤宏(編)『バングラデシュ：低開発の政治構造』研究双書 No. 393, 東京; アジア経済研究所, 1990年, p.250.)。
- (24) Fuglesang, Andreas, & Dale Chandler, *Participation As Process-Process As Growth: What We Can Learn from Grameen Bank* (Dhaka; Grameen Trust, 1993, Reprinting 1995), p.20.
- (25) Yunus, Muhammad, *Grameen Bank Project in Bangladesh: A Poverty Focused Rural Development Programme* (Dhaka; Grameen Bank, 1982), p.9.
- (26) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p.20.
- (27) Ibid., p.21.
- (28) Yunus, op. cit., (not.25), p.10.
- (29) ロバート・チェンバース『第三世界の農村開発：貧困の解決——私たちにできること』(東京; 赤石書店, 1998年), pp.200-201.
- (30) Gibbons, David S., *The Grameen Reader* (Dhaka; Grameen Bank, 1992, Second Edition 1994, Reprint 1995, 1999), p.21.
- (31) Yunus, op. cit., (not.20), p.4.
- (32) Yunus, op. cit., (not.25), p.8.
- (33) 佐藤宏「バングラデシュの権力構造——従属的軍・官僚国家における権力と権益」佐藤宏(編)『バングラデシュ：低開発の政治構造』研究双書 No. 393 (東京; アジア経済研究所, 1990年),

- pp.23-25.
- (34) Gibbons, op.cit., (not.30), p.29.
- (35) Yunus, op. cit., (not.25), pp.8-9.
- (36) Yunus, op. cit., (not.16), p.8.
- (37) Yunus, op. cit., (not.16), p.3.
- (38) Yunus, Muhammad, *Alleviation of Poverty Is a Matter of Will, Not of Means* (Dhaka; Grameen Bank,1994), p.5.
- (39) Yunus, op. cit., (not.20), p.4.
- (40) Yunus, op. cit., (not.1), p.13.
- (41) Gibbons, op. cit., (not.30), p.29.
- (42) Yunus, op. cit., (not.20), p.5.
- (43) Yunus, op. cit., (not.38), p.5.
- (44) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p.5.
- (45) Yunus, op. cit., (not.25), pp.10-11.
- (46) <http://www.grameen-info.org/bank/hist79-76.html>
<http://www.grameen-info.org/bank/hist85-80.html>
- (47) Gibbons, op. cit., (not.30), p.12.
- (48) <http://www.grameen-info/wallstreetjournal>
- (49) Khandker, Shahidur R., Baqui Khalily, & Zahed Khan, *Grameen Bank: Performance and Sustainability*, World Bank Discussion Paper, No. 306, (Washington, D. C.; the World Bank, 1995), p.89. Table 3. 1.
- (50) バングラデシュにおける, 1998年の成人(15歳以上)非識字率は, 男性49%に対し, 女性は71%である(*World Development Report 2000/2001*, P.276. Table 2)。
- (51) 財団法人国際協力推進協会『マレイシア』開発途上国国別経済協力シリーズ, アジア編 No. 4 第6版(東京; 財団法人国際協力推進協会, 1996年度), p.64.
- (52) Bornstein, David, *The Price of a Dream: The Story of the Grameen Bank and the Idea That Is Helping the Poor to Change Their Lives* (New York; Simon & Schuster, 1996), p. 26.
- (53) ムハマド・ユヌス&アラン・ジョリ「ムハマド・ユヌス自伝——貧困なき世界をめざす銀行家」(東京; 早川書房, 1998年), pp.343-350.
- (54) 「世界銀行ニュース」1997年3月1日発行 Vol. 6. No. 46.
- (55) Jain, Pankaj S., “Managing Credit for the Rural Poor: Lessons from the Grameen Bank,” *World Development*, Vol. 24, No. 1, (1996), pp.79-89.
- (56) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 92.
- (57) Gibbons, op. cit., (not.30), p.64.
- (58) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 92.
- (59) Ibid., p.44.
- (60) Ibid., p.99.
- (61) Ibid., p.100.
- (62) Ibid., p.45.
- (63) Ibid., p.86.
- (64) Ibid., p.45.
- (65) Ibid., p.49.
- (66) Ibid., p.44.
- (67) エンパワーメント (Empowerment) : 力をつけること, あるいは力を獲得すること。例えば, ジョン・フリードマン (Jhon Friedman) は, 貧困とは社会的な力の剝奪の一形態とみる。詳しくは, フリードマンの著書『市民・政府・NGO——「力の剝奪」からエンパワーメントへ』(新評論, 1995年)を参照。
- (68) Bornstein, op. cit., (not.52), p.135.
- (69) Ibid., p.46.
- (70) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 45.
- (71) <http://www.grameen-info.org/annualreport/foreword.html>
- (72) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 52.
- (73) <http://www.grameen-info.org/bank/hist2001.html>
- (74) Grameen Bank, *Annual Report 1999*

- (Dhaka; Grameen Bank, 2000), pp.9-17.
- (75) Ibid.
- (76) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 56.
- (77) Ibid., p.81.
- (78) Ibid., pp.84-85.
- (79) Ibid., pp.66-67.
- (80) Ibid., p.67.
- (81) Ibid., pp.67-68.
- (82) Ibid., p.67.
- (83) プロジェクトにより認定されたことと別の目的で使われていた事例もある。子どもの結婚のための持参金, 医薬品の購入, 緊急の消費財, メンバーが海外へ出稼ぎするための資金などである。詳しくは, Aminur Rahman の論文 (“Micro-credit Initiatives for Equitable and Sustainable development: Who Pays?” *World Development*, Vol. 27, No. 1, (1999), p. 68.) を参照。
- (84) Yunus, op. cit., (not.16), p.1.
- (85) Yunus, Muhammad, *Towards Creating A Poverty-Free World* (Dhaka; Grameen Bank, 1997), p.19.
- (86) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 74.
- (87) Ibid., p.74.
- (88) Khandker, Khalily, & Khan, op. cit., (not. 49), p.51.
- (89) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 75.
- (90) Gibbons, op. cit., (not.30), p.70.
- (91) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 76.
- (92) チェンバース・前掲書 (注29), p.390.
 ピーター・バーガー (Peter Berger) は, 意識の諸世界の平等性の公理に基づく態度, すなわち他人が現実を規定する方法をきわめてまじめに認めることを, 「認識的顧慮 (cognitive respect)」 (『犠牲のピラミッド — 第三世界の現状が問いかけるもの』, 東京; 紀伊國屋書店, 1976年) と呼んでいる。ここでは, 学歴があるグラミン銀行の訓練生が, 自分の人生を語る学歴の低いグラミン銀行のメンバーに対して払う尊敬のこと。
- (93) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 76.
- (94) Ibid., p.77.
- (95) Gibbons, op. cit., (not.30), p.70.
- (96) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 77.
- (97) Gibbons, op. cit., (not.30), p.71.
- (98) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 78.
- (99) Ibid., p.75.
- (100) Khandker, Khalily, & Khan, op. cit., (not. 49), p.102. Table 5.1.
- (101) 渡辺龍也『「南」からの国際協力 — バングラデシュ グラミン銀行の挑戦』岩波ブックレット No. 424 (東京; 岩波書店, 1997年), p.38.
- (102) Isaiah Berlin は, 消極的自由 (freedom from) と積極的自由 (freedom to) の2つの概念を用い「自由」を説明している。詳しくは, アイザイア・バーリン『自由論2』(東京; みすず書房, 1971年)を参照。
- (103) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 39.
- (104) Ibid., p.40.
- (105) Gibbons, op. cit., (not.30), pp.81-82.
- (106) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 39.
- (107) Gibbons, op. cit., (not.30), p.81.
- (108) Ibid., p.83.
- (109) Ibid., p.84.
- (110) UNDP『人間開発報告書1997 — 貧困と人間開発』(東京; 国際協力出版会, 1997年), pp. 4-5.
- (111) チェンバース・前掲書 (注29), p.200.
- (112) Khandker, Shahidur R., *Fighting Poverty with Microcredit: Experience in Bangladesh* (New York; Oxford University Press,1998),

- pp.58-59. Table 3. 1.
- (113) Ibid., pp.56-59.
- (114) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 15.
- (115) チェンバース・前掲書 (注 29), p.343.
- (116) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 16.
- (117) チェンバース・前掲書 (注 29), p.343.
- (118) 貧困の文化 (culture of poverty) : この言葉を最初に使ったのは、オスカー・ルイス (Oscar Lewis) である。彼は、著書『貧困の文化 — 5つの家族』(東京; みすず書房, 1969年), 『サンチェスの子供たち — メキシコの一家の自伝』(東京; 新潮社, 1970年)で、貧困の文化を追及しているが、否定的な要素を含むものを貧しさの特性としてあげている。
- (119) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 18.
- (120) Ibid., pp.16-17.
- (121) Yunus, op. cit., (not.25), p.7.
- (122) 下沢嶽「バングラデシュの NGO の現状」佐藤寛(編)『開発とバングラデシュ』『経済協力シリーズ 183』(東京; アジア経済研究所, 1998年), p. 63.
- (123) チェンバース・前掲書 (注 29), p.361.
- (124) Yunus, op. cit., (not.25), p.5.
- (125) Yunus, op. cit., (not.85), p.7.
- (126) チェンバース・前掲書 (注 29), p.200.
- (127) Yunus, op. cit., (not.9), p.141.
- (128) Yunus, Muhammad, “The Grameen Bank,” *Scientific American*, Vol. 281, No. 58 (Nov.), (1999), p.118.
- (129) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 209.
- (130) Ibid., p.96.
- (131) Yunus, op. cit., (not.25), p.24.
- (132) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 103.
- (133) Yunus, op. cit., (not.25), p.15.
- (134) Grameen Bank, op. cit., (not.74), p.33.
- (135) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 108.
- (136) Ibid., p.107.
- (137) 出生時における平均余命は、1998年において、男性 60.7歳に対して女性は 60.5歳となっている (Government of People’s Republic of Bangladesh, 1998 *Statistical Yearbook of Bangladesh*, Dhaka; Bangladesh Bureau of Statistics, 1999, 19th Edition, p.37)。
- (138) 村山真弓「女性の就業と社会関係 — バングラデシュ法政労働者の実態調査から」押川文子(編)『南アジアの社会変容と女性』研究双書 470 (東京; アジア経済研究所, 1997年), pp. 46-47.
- (139) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 27.
- (140) Yunus, op. cit., (not.1), p.17.
- (141) 渡辺・前掲書 (注 101), p.48.
- (142) プリギッテ・エルラー『死を招く援助 — バングラデシュ開発援助紀行』(東京; 亜紀書房, 1987年), p.5.
- (143) Grameen Bank, op. cit., (not.74), p.42.
- (144) <http://www.grameen-info.org/bank/hist2001.html>
- (145) ユヌス&ジョリ・前掲書(注 53), pp.138-139.
- (146) 同上, pp.287-288.
Bornstein, op. cit., (not.52), p.301-307.
- (147) Ibid., p.137.
- (148) Yunus, op. cit., (not.25), p.7.
- (149) Ibid., p.7.
- (150) Yunus, op. cit., (not.20), p.6.
- (151) Yunus, Muhammad, *Jorimon and Others: Faces of Poverty* (Dhaka; Grameen Bank, 1984, Reprint 1996), foreword, xvi.
- (152) Yunus, op. cit., (not.25), p.7.
- (153) Yunus, op. cit., (not.20), p.6.
- (154) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p.5.
- (155) Yunus, op. cit., (not.25), p.5.
- (156) Yunus, op. cit., (not.20), p.6.
- (157) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p.

- 127.
- (153) Yunus, op. cit., (not.151), foreword, xix.
- (159) Yunus, op. cit., (not.16), p.12.
- (160) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 127.
- (161) Yunus, op. cit., (not.1), p.12.
- (162) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 141.
- (163) アマルティア・セン『自由と経済開発』(東京；日本経済新聞社，2000年)，pp.215-216.
- (164) Hashemi, Syed M., Sidney Ruth Schuler, & Ann P. Riley, “Rural Credit Program and Women’s Empowerment in Bangladesh,” *World Development*, Vol. 24, No. 4, (1996), p. 650.
- (165) Ibid., p.649.
- (166) Schuler, Sidney Ruth, Syed Mesbahuddin Hashemi, & Ann P. Riley, “The Influence of Women’s Changing Roles and Status in Bangladesh,” *World Development*, Vol. 25, No. 4, (1997), p.572.
- (167) Hashemi, Syed M., Sidney Ruth Schuler, & Ann P. Riley, op. cit., (not.159), p.650.
- (168) Fuglesang & Chandler, op. cit., (not.24), p. 121.
- (169) Grameen Bank, op. cit., (not.74), p.7.
- (170) <http://www.grameen-info.org/hist2001.html>
- (171) Grameen Bank, op. cit., (not.74), p.7.
- (172) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 110.
- (173) シャプラニール=市民による海外協力の会『バングラデシュの女性たちは今～世代を通してみえるもの～』SHAPLA NEER BOOKLET SERIES 9 (東京；シャプラニール=市民による海外協力の会，2001年)，p.38.
- (174) Hashemi, Schuler, & Riley, op. cit., (not. 160), p.650.
- (175) チェンバース・前掲書 (注29)，p.354.
- (176) <http://www.bd.ec.org/election.php3?start=1>
- (177) Jolis, Alan, *Microcredit: A Weapon In Fighting Extremism*. (<http://www.grameen-info.org/mcredit/weapon.html>)
- (178) <http://www.ne.ja.asahi/bhalo/news/200110.1.html>
- (179) Ibid.
- (180) <http://www.ne.ja.asahi/bhalo/news/200110.1.html>
- (181) UNDP, op. cit., (not.110), pp.6-7.
- (182) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 3.
- (183) Yunus, op. cit., (not.85), p.22.
- (184) Ibid., p.5.
- (185) Fuglesang, & Chandler, op. cit., (not.24), p. 238.
- (186) Ibid., p.238.
- (187) Yunus, op. cit., (not.1), p.6.
- (188) ユヌス&ジョリ・前掲書 (注53)，p.347.
- (189) Yunus, Muhammad, *Peace is Freedom from Poverty* (Dhaka; Grameen Bank, 1994), p.9.
- (190) Ibid., p.6.
- (191) Ibid., p.6.
- (192) Ibid., p.9.
- (193) Ibid., p.11.

(みずぐち みかこ)